標注七部集

乾

へ 5
703
1

標注七部集

潘宏藏

七部集盛行于世久矣其為書也彰妙於言外徵巧於單辭使讀者不倦且悟入其奥旨可謂盡矣然鑽厲有年間句棘難解未有能正之者或一家妄說或自己憶斷區区紛紛至于今吾國有西馬師耽情蕉翁學旁涉獵百家西行東游遂獲七部集善本更訂魚魯蓋諸註遺漏提要鈎玄名曰標註七部集稿成將上梓未半病厚臨

終顧請託予遺稿刪復補闕吾塵纓暇亟
ゞ所聞不敢加憶度檢手書板之乃成定
本令友人幹雄掌梓於是乎邪論日去正
風月新誠從此岐至彼道捷徑偏移風化
俗一餘師云爾

元治紀元甲子季春　上毛後學琴堂識

江戸秋巖原暈書

東京大學圖書館藏
駒込千駄木町百拾壹番地
坪内雄藏

七部集標注凡例

此書ハ俳諧第一の写本なれハ其ハ其ハ宗匠
四部の伝授ありてあらまし一八人の考を要なるを彼と是
を打照し中ハ中ハ陸奥出羽の細説を加へる事ハ
て初学の人に速ひ年来或ハ都鄙の名士ものこり稀
なる者乃出ることを歎ひて先師三千餘
年の百ハ年ことを稽ひ是をはかるハ古人の
事なり　彼を捨是をはかるハ古人門葉の
分ち皆こんとす様ことの数ハ形ハ自ハ五人
宮しはんるかるそ根本ハ名聞ものを
をもとなるいまをこの本ハ世ハ没ハ

八まは　桂園一の主張にして四ひらにて剪采
故に詞章にそのまゝなるもあり
倫をへらんとすれども古人の歌句解釈を加へるかゝ
とゝ云　その為八解釈
きるる事八ひとり人心をもちさんとすれ今吾七歌の
標注をあらそふとゝ也　故に意を解　大あらん古事
古歌名所地名皆有名者こゝ集てをはのゆえ
きまり又八原本著者の倶等をまゝて句をゑらん人の助
とゝなるべしとかゝあきハ注釈ものに四方人
（著者のこゝ）　必注を分とて句を詳とへらん
句を四て心の陸ゝ対注をゝんてその陸りを陸ゝ

その〻原伊長ゝ実八解ものゝ〻〻〻〻　徒ゝ
ゝ縄ゝ人今ゝ自ゝ八年月ゝ日ゝ何ゝ〻〻の
ゝ〻〻〻〻〻

一詩題の部原本とあ違するあるハ其出書ゝ〻て正
部後の句を所ゝゝきハ本文をゝ〻ゝ〻ゝ古人ゝ人ハ
朗詠ゝ〻〻〻　あゝれハ遠ゝあゝ〻　的係ハ解ゝ
の有文をあゝ句意のゝ〻〻の
一世の七影集ゝのみゝゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
ゝるハゝその集の著ゝ〻る意化の頃をゝんするものゝ
一引書文長ゝ有ハ妻　ゝ久あけ出ゝ〻て何ゝ何ゝ
ゝ寸ゝハ本書ゝ〻ゝ〻ゝ

一初心の解しがたき句法等まで書き入れ侍る所多し
なほ考へ強て加へ侍る
一異本又は校合異同しるしまで書きと撰者没後なれハ故
て正しき事しるし難し

潛窓しるす

利
門
號 703
卷 1

惺庵西馬述
潛窓しるす雅編
不知庵寄三校

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

題号ノ説多シトイヘトモ巻頭ノ句々皆冬季ナリヨツテ冬ノ日ト云カ諸解略之
途ハ道ナリ
侘ハ失志ノ貌
狂句ノ二字後ニ取捨玉ヘトモコヽニハ狂歌ノ気味多リ貞享ノ初年マテハ字余リ作多シ
竹斎ハ山城ノ人尾ノ名古屋ニモ居住ス寛文年間ノ人ナリ天和三年印本竹斎物語狂歌数多アリサレトコヽニ擬トスヘキ歌ナシ此句浮哉トイヘトモ和歌ニハ咄哉多シ艤ノ哉トモ云
とばしるハ飛走ナリ原本濁点アリ炭俵ニとばしるも点ヲ白ヲトモアリ
主水職原抄聞書ニ掌泉水

冬の日

笠は長途の雨にほころび紙衣は
とまりとまりのあらしにもめたり
侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえける
むかし狂哥の才士此国にたどりし事を
不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国

井水又氷室官名ニテ人倫打越ノ論ナシト云
朝鮮芒トイフ一種アリ万葉ニ艶ヲニホヒト訓リ
髪をはやすハ業平古事江記ニ業平為生髪到陸奥ト云又撰名抄ニモ出
たへしハ堪シナリ
伊勢浮洲又摂津田中村ニモ有ト云小万ガ墓印ノ柳ナリ
ちんばハ跛
たそかれハ日本記明達又山家集ニ

日のちりちりに野に米を刈　正平
わが庵は鷺にやどかすあたりにて　野水
髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすごすごとなく　荷兮
影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧に舟ひく人はちんばか　野水
たそがれを横にながむる月ほそし　杜国
となりさかしき町に下り居る　重五

あらら山さうのハトもこれ云カ考證アレトモコハ俗ニハ一黙レキ コトナレハ
中古カル反持ノ詞多シ
二の尼ハ一鵲ニ鵲ト云カ如シ
あやめのむハ西行櫻ノ謠ニ也物
名ノ糸櫻トアリ
鼻のむハ酒ナリ詩陳風傳ニ
自鼻曰酒
熊坂物見ノ松ハ美濃國青野ノ原ニアリ白雲水ハ同國郡上郡
宮瀬川ノ邊ニアリ對附ナリ
唐苣ハ萵苣自萵國來故ニ名ク
家園ニ多ク栽ル白苣ヲ光ル
烏賊ノ石ハ古事記万葉ホニ鹿ノ
肩燒見タリ唐土ニ龜トリ西
戎ニ羊トアリ其ノ一轉カ

二の尼ふと酒のむの生りきく　野水
櫟ハむくらとなりて鼻にこそむ　芭蕉
系物ゑ篇遠就おろかなる　重五
名た姫の矢をたちつ射　荷兮
盜人の記念ぬ杜の吹をきて　芭蕉
志ら〳〵と家庭の名を付　杜國
笠ぬきて世理ものゝ小叫る　荷兮
名ハ拾ひけてひいらり萵苣　野水
志ら〳〵と殘ら人の貴の何　杜國
烏賊ハえいもの國のうらうら　重五
あられさの謎ゑもけし時分　野水

秋水一斗ハ漏刻ヲ云ナリ
事苑ニ日東ハ則日本國也
石川丈山ヲ日東李杜ト云
先哲美談ニ素堂カ詩ニアリ
五車瑞韻ニ汝陽王雄打曲明
皇自摘紅樣置雄帽上
とぬしふハ帽ナリ
鮓ハ俗字和名抄ニ鮨又鱁
居湯ハ釜チキ風呂桶ナリ
瀝テト讀又漉トモ云
白氏文集三卷十月照藤花影上
階

秋水一斗酒つくす教そ　芭蕉
日東の李白ハ坊主を見て　重五
中ゑ水樓殘もそむ聖打　荷兮
牛の行ゝ〳〵ふ芋の〳〵ゝ　芭蕉
簀ゑ鮓の魚をいたゝき　杜國
あいのうゝ〳〵ふハ妹の眉かをふ申ま　荷兮
殘ぬとゝ居湯ゑ馬賀の毛濂て　野水
彦ゝトゝ古ゑ蘇の新つゝふや　杜國
　　重五

文選ニ振衣千仞岡 左太冲
杜律ニ老大徒悲ハ赤縄ヒ衣ヲ
ゆゑなり 又ト云ハ非九ヘシ
ゆゑ
躭ナリ
麻呂ハ上古男子ノ通稱ニ多シ
鶯歌ハ樂器ナリ
貞徳ハ風雅ニ富ミ且長壽ナリ
桃園芍藥園柳園ハ兎至ホノ
別荘アリ
淺香ハ陸奥 雨越ルニテ淺シト云ニ
俳諧ノ冠辭カ又ハ元ノ假名ノ
多ヘルカ

おもへ（とも壮年
いまくまろも伐採ちん
たつ雲のたゝ一も待ぞ之新
雲よまぶ見る蕣の餞 埜水
壁葉陰て尋ぬる樵の昭を待て 杜國
鶯吟ぶ樹と車ひきたり 芭蕉
麻呂この月袖ふ翻故を惜まん 羽兮
桃もを手折る貞徳の冨 亡子
雨ふゆる淵瀬の田螺拾ふ 杜國
桑のきちらを伐ふ法師 雪水
床更て孤枕ふ聞ちする男 羽兮

疣 稲ハ借字カ
殼と
謂ナリ
繩網のかゝりハ鞠掛リナラン
巍く 違ト附ナリ
禿童ハくらハ幾許等年ソト
尋問意ナリ
春季ヲ用ヒスシテ春ナリ

孤さまたけの水のあらし 芭蕉
口をしと癖をちきるちゝき 雪水
ゆゆハかをふ首送りもれ 羽兮
小三ちゝをふ爲ちゝをひらうゑ 芭蕉
月ハ蓮うれ牡丹ぬ す人 杜國
孤ちゝのかゝりをやれ壁葉て 羽兮
ちゝとのゝ地蔵きる所 羽兮
初むの世ちゝ姫のゆのめしく 杜國
かゝるちゝちゝをかを ゆき 雪水
橋筆まを忘る国不のちゝる 羽兮
うくひす 都よ虎蝶ちゝて 芭蕉

不破ハ美濃ナリ今ハ関ナシ
古集ニハ名所地名ニ多ク對ノ附
リ

傘ハ偽字正字傘ナリ

唐輪ハ髷ノ名ナリ

慧照禅師ノ母ノ面影ヲ臨濟ハ
院ノ名ナリ

四部禄十牛圖ニ見ル所ノ山

篠の葉の葉ずれ初時人の来よ頃て　野水

ひとつ橋ハ柳の幕をかけ
ゝ不破の関人
をきのゝ義流て打る碁を忘る
祿さめ　のさゝも　七十
年加めハ活者ハ重ゝ為ゝ
ひとつの傘の下幕ひさし
葉ゝ池ハ撥るのゝ松ふ夕月碁
雪ふるまつゝ為様をすき
月ハたてる庵輪の数ハ来れて
為をぬきぬく陽落を問
秋蝉の蛍さく志つのき

重五
芭蕉
杜國
重五
為兮
雪水

の牛ゝ見ル所ノ山

秋蝉藤實ニ句一意ナリ
職原抄内侍司ニ掌侍人典侍更
不家物語小原御幸ノ面影ハ

三日の月ハ上巳ナリ烏軍ハ闘
雑ノ一轉ト云
白髮トモ白紙トモ云リ一本ニ
白雲ニ誤ル

字典ニ兩舉足曰歩一歩ハ六尺也
古本ニ雲霽ハ書損和名抄ニ霽雨
字典ニ小雨也
稲妻ハ比喩ナリ
齒朶ハ裏白ナリ

枝をひろ事
傘ゝ十ゝ

ゆくみこうきそ白ゝ蓬露岩　杜國
氷ゝ水ゝ水の稲つ淵　重五
歯朶の夢ゝ初狩人の矢よ頃て　野水

重五
芭蕉
杜國
重五
為兮

扇ハ扇形ニ編タル具ナリ

勞氣俗ニカハユケリ

大和物語ニ女ありけるとこ意義の男二人ありけるとき一のあるさまを又鶴をあとぢるなとやうのおとりなり　云云　コノ一轉ガ畧シテ云スベシ

シカラキハ近江ナリ坊ハ邑里ノ名ナリ

雜ニハ雜ナリ

命婦ハ職原抄ニ中臈トアリ又嬪人帶五位以上云　なとと書ナリ

北の御門を押あけうしろ
る糞かく扇よ風のうち雲を
葉の酒をしゝむ野辺の蘆を英
らうたけなれよむ姫かしづきて
灯花ゆくつゆ情をらみる
義経の弓撲カ城拯られし
蕎麦さへ濃賀楽の坊
教月夜双六打の秘蔵して
おもに買みちよおとをきく
志のあるかわぎとて鞍を作りたる
命婦の君より米なんどを送

芭蕉　荷兮　西平　重五　杜國　芭蕉　野水　杜國　荷兮　野水　重五

籬ハ釋名ニ以柴作之

洪波

解ハ庖丁スルナリ

縣ハ田舍ナリ物ヲハ經ルナリ花見次郎ニ附會ノ說ヲ云本旨ニアラシ

五形ハ碎米薺ナリ蓮花草トモ云

公事根元ノ御形ニハ非ス

原本ちゝ一本ちゝハ非ナリ

呼出ノヤナリ中ニ心ナシ外曲ル

シカラスコレハ靡キノ貌也

平家物語妹うとハうとかるとこ

そ來よ名れ此一轉カ

釋惠崇カ詩ニ笠ノ重ニ吳天雪

鞋香楚地花

海かき近津浜の水よう猶約

佛滄たる魚解きそり

縣ゆるも見次郎と仰この樫て

形筐の畠　六　反

うれしけよ時雨ちゝと

去屋のるけ武と京や

冨さをや矢鄰の樫の書き沈

庄屋の杉をよみておくりぬ

拯ゝ子ハ柴刈髮ヨのひらん

梅ゐを金く力蓑る年

雪の粧吳の國ハ笠ならしよ

荷兮　芭蕉　重五　杜國　芭蕉　野水　杜國　荷兮　野水　重五　荷兮

万治ノ高雄尤名高シ
仇ハ徒心人なり
南堂ニ露ばかりの棺を舂ほして
身ハおのれ名をこぼすといふ心ニ底深
名をこぼす禅ハ一休禅師ナドノ面
影なり
禅ニさ事トモ又借テ語ス姿ト
モ云リ飲トまて飲ス後ニアレハカリテ
留スナラン

おもひかねつも心のやみを夢にさへ
見えけるかな
山家集 願くハ花のもとにて
春死なんそのきさらきの望月
のころ

襟に高雄が片袖をとく　芭蕉
あだ人と樽を棺に呑ほさん　重五
芥子のひとへに名をこぼす禅　杜国
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
秌湖かすかに琴かへす者　野水
烹る事をゆるして鯊を放ちける　荷兮
聲よき念佛藪をへだつる　杜国
かげうすき行燈けしに起わかれ　野水
おもひかねつも夜るの帯引　重五
[illegible]の花に[illegible]の絵にハ　荷兮
其望の日を我もおなじく　芭蕉

一巻中弐留ニ句有名別意なり
万葉集 難波人葦火焼屋之酢四手雖有己妻許増常目頬
拾遺ニ 難波人あしひたく屋にやとかりて
れにあり
色こそ… カラニノ意なり
職人尽歌合体ノ対附ナルヘシ
鏡磨ノ身ノ貧キヲ云ヘ分
原本トギサムノ附カナアリ
棘ハ正字なり 古本棘ハ偽字
一本荻ニ誤ル 織ハアミタルヲ云カツ振賣スルナリ
微ナリ古本 懺ハ書損 加茂ナル社稲荷ノ祭ヲ九月上ノ午日胡麻ヲ供ス
岩倉ハ山城 加茂岩倉対附なり

なに波津にあし火焼家はすゝけて
きつけた継を　重五
炭売のおのがつまこそ黒からめ　荷兮
人の粧ひを鏡磨く寒　杜国
花棘馬骨の霜に咲かへり　野水
鶴見るまどの月かすかなり　芭蕉
風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　羽笠
荻織るかさを市に振する　荷兮
かも川や胡麻千代祭り微ならん　重五
岩くらの聟なつかしのこと

古本操誤

山谷カ四休居士ノ詩序ニ三平二滿過則休三平二滿ハ俗ニ云ル於多福ナリ[illegible]ハ嘆ナリ

本郷ハ江戸ノ地名

古本徽字書ニ[illegible]ハ誤字ニテ凝ノ借字カ又徽カ諸説未詳

[illegible]

敷冬ハ蕗ナリト[illegible]常ニ用ヒ来ル多和名抄ニ出禪録二口呑盡江海水ト

おもふ子布搗哥よめるもしら
うきもまもちなる越るこれ
搖らまてくねる駕の雞袖
火おこのぬ火燒きをんをん
門ちのなる孤なかりて搖る
血ヲかくきの身のたくきヲ
旁ヲりて本郷の猪七門きく
みちの納豆たくなくし
むと注搖の懲とすてたる
信ちのいたれ歎きを呑
白蓮濁らぬ水ヲ羽を洗ふ

哽水
杜國
羽笠
芭蕉
手ヲ
義子
杜國
哽水
芭蕉
羽笠
義子

兎併ホノ呑ト見テ打越飲食難ナカルベシ諸解文詳
白燕云云[illegible]
宜旨[illegible]
八十歳[illegible]
ルベシ
朗詠[illegible]
西陽雜俎一月桂島百丈ヨリ桂ノ花八月ノ異名ナリ

本草ニ蘭茎可作膏塗髪トアリ

はやり正月ヲ云リ

晉書常有紫氣室劍之精上徹於天

南字ヲ付句ノ方ニテハ南都ト見カヘタリ奈良ニハ古キ仏達ト云ルモ理

宣旨かしこく鍬を鑄る
哽水
杜國
羽笠
芭蕉
手ヲ
義子
杜國
哽水
芭蕉
羽笠

西方の菜の油ホ志めホうつ吉
鍋の中ニ異なる女尼てこくる
約瓶ヨ西瓜あらふ日社ヲ花
ちやりすて接ぶ明ける正月ホ
數ヲ向ける年ノ義の食
寅の日社旦を搬治の魚起て
ヲ分うたてき南京の地

合スヘシ

鸛和名抄ニ此鳥似鵠而巣樹者也ハ鸛ハ字典頭無丹頂身似鶴又俗ニ鳴則晴俗鳴則陰鵠又字鏡長帛ハ長ク秋ハアト歓ハト笑ヒアト悲ミハト歎クアトハレト重リテあもれハ云ナリヨツテ歎息より喜怒哀樂ニワタレリ

いうきして強く恋ふる人の像　藤原
源よりあくるの清き井の根　季吟
鄰すくるる暁毛よかしまはり　堂水
物たのの下小繰ふ　去　丸　芭蕉
小のうくたるく藤切ぬて　羽笠
孫ゝ絶ぬ夢を蓼むるむる　杜國

四季哀傷

雲月や鶴の行とまるを見て　藤原
冬の野日のあたれたり今　黄蕉
樫根山ふの仏を木の葉塚　言正

はゝ物の数ふる状の詞ナリ
ナカニ二通フト云ハ非ナリ

家仮初ナリ

東海道藤澤山清浄光寺不二見ノ尊ト又駿州藤枝の兒岩寺ト椿トスル和字ナリ七ト方葉和名抄ニ出

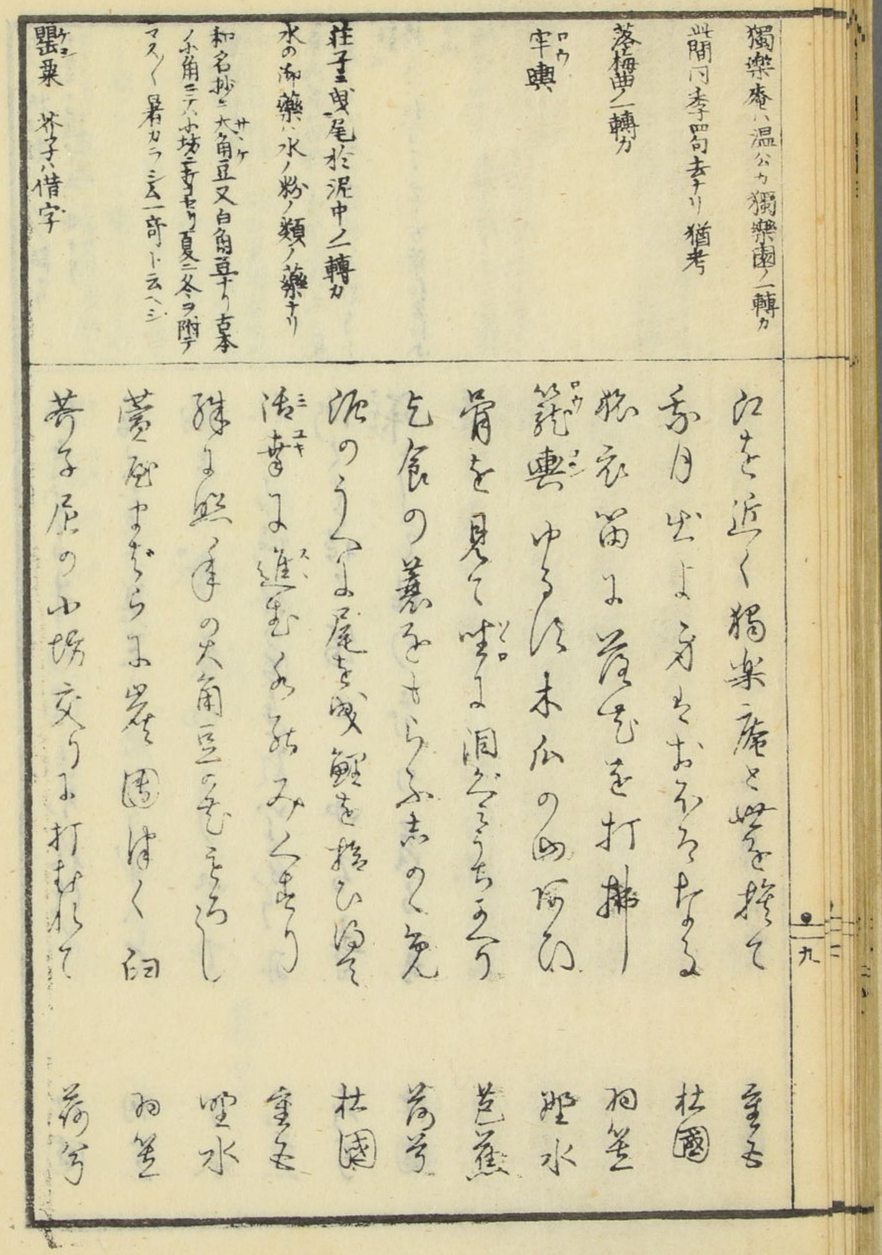
題林愚抄ニ長宋形ると名ゆ長後ちなつのむれい為くれちあるよ五ゆる条遊家隆

山橘ノ方葉ニ数柑子ヲ云ヒハ雲御抄竟憲秘抄ホニ牡丹ヲ云フソノ方ニヤ

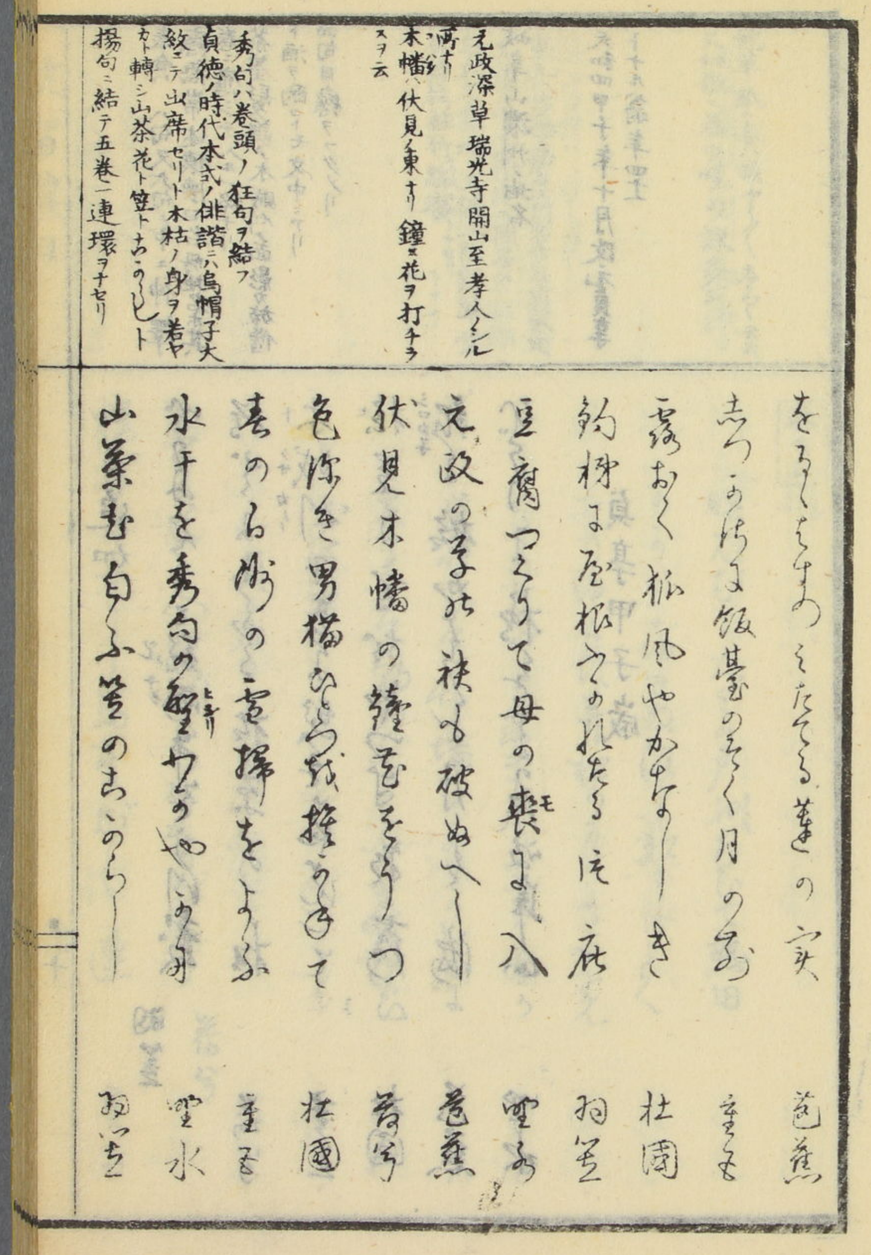
麻刈集ハ作名ノミ

ひきずる牛の塩ふれ流く　杜國
吉ふ方の吉き具足ゆ月弦ふ　羽笠
酌ふる　蓼　葉切ふ以で　堂水
秋の高原旅の法を敷ひ分り　芭蕉
漸くを接て第土をゆる土寺　藤兮
寂ふて桂の毛の蓼る吉　杜國
葉ゆ葉ゆふをを毛る風の長　季吟
雑遊ふ鳥帽子弦　女ゆ三十　堂水
唐ふ木男紙る意の為ふ　羽笠
夏源き山橘ふはくら　藤兮
麻ふのり　芭蕉

獨樂庵ハ温公カ獨樂園ノ一轉カ
此間同李罰去リ猶考
落梅夢ノ轉カ
牢輿
荘子ニ曳尾於泥中ノ轉カ
水の面藥ハ水ノ粉ノ類ノ藥ナリ
和名抄ニ大角豆又白角豆ナリ古事
ノ小角ニテハ坊ニ寺モリ夏ニ冬ヲ附テ
マスヽ暑カラ三五一奇ト云ヘシ
黐粟　芥子ハ借字



元政深草瑞光寺開山至孝人ニシル
所ナリ
木幡ハ伏見ノ東ナリ鐘ニ花ヲ打チラ
スヲ云
秀句ハ巻頭ノ狂句ヲ結フ
貞徳ノ時代本式ノ俳諧ニハ烏帽子大
紋ニテ出席セリト木枯ノ身ヲ若キ
カト轉シ山茶花ト笠ト古ノ〻ヒト
揚句ニ結テ五巻一連環ヲナセリ



表合八　八句又六句ノ中ニ神釋
戀無常述懷懷旧名所地名本其
巻ニ應シテ入レ格ナリ
茶筌髪謡ノ木賊刈面影ヲ旅僧
ト酒ヲ酌コトモ文中ニアリ
四句目戀ヲフクノリ

岐阜山濃州ノ地名

天和四甲子年十月改元貞享
ト十九翁年四十

追加

いとのみだれを新西牛をうり霞　明笠

柳ちるあふる柘榴の枝　芳雪

木賊刈ふるを数をちやせんじて　素堂

檜笠は定紋やつす春霞　杜國

紙子は格ぬぎすし月も海　芭蕉

ひぐらしは柳をさすの岐阜山　野水

貞享甲子歳

枕草紙ニ春ハ曙ヤウ〳〵シラク云云
又和歌ニ春の曙の詠多シ

重五北藤嘉右エ門名古屋木町
久後ニ宮ノ駅ノ辺ニ閑居ス
白氏文集巻十五架三間新草堂
石階桂柱竹籬蠻トナセリトアリ

春の日

曙見むと人をの戸ぬきあひて熱田　昌圭

のこるさゆきの波浪　紅葉ちる

ちりゆくは并松のこるも哀なり　芳雪

わらそいと世宝ちり　素堂

紫雲おくる并墻ちかのきさま　素堂

去よりなほのもしまの山　芳雪

出行る

二月十八日

まめくやく人さぐくの伊勢参り　蕉兮

柳ちる中ノ馬ちりがく　重安

霞晴テ山館ノ時ニ顯タル夕月
夜ノ光景ヲカク奇ニセリ

青葉ノ笛ノ旧淚カ
異本ニ[illegible]ト誤
文王の林ハ詩經大雅「周原膴膴
堇荼如飴」「[illegible]之陾陾度之薨薨
築之登登」コノ章ノ意トリ

古本晨明ハ誤字郁晨カ

山高む月一叢なる館立て　雨桐
霧たつの[illegible]弘史よあるる也　李尭
汐風よりよりく雪を敗たく　昌圭
[illegible]の[illegible]の岩ほく見え　孰苧
須戸寺み浮の蛙を祝ふ　堂丘
おのく[illegible]た笛を載く　義兮
文王弘林よりふも土佐りて　李尭
百の[illegible]は角のなき葉　雨桐
紅葉ニ一度ハ骨我おく世ホ　義兮
低塚紅葉をかくしある景　昌圭
春林ふ錦よ人の紅袴り　雨桐

和名抄ニ雞栖

梓巫ナリ
サガ尼ナリ続世継ニ[illegible]
せるびいとり
甚長ナリ針立鍼医ナリ
職原抄ニ針博士五位下典藥頭
ニ准シテ五位カ
徒跣

[illegible]の[illegible]師[illegible]かく[illegible]　堂丘
[illegible]の[illegible]奥の[illegible]　昌圭
[illegible]き[illegible]弘[illegible]あぐる[illegible]　李尭
柳よき法ぞ[illegible]ら[illegible]鞠なきや　堂丘
入の[illegible]ゆ[illegible]操[illegible]く[illegible]里　義兮
[illegible]の[illegible]と[illegible]なる[illegible]連[illegible]て　李尭
[illegible]懷年　梓[illegible]き[illegible]影　雨桐
[illegible]数[illegible]なる[illegible]ぬる[illegible]切[illegible]　義兮
[illegible]かし[illegible]き[illegible]位の針立　昌圭
松の本よ[illegible]の門[illegible]ぬき　百相
[illegible]て[illegible]ぬ[illegible]て　堂丘

朝熊伊勢ヨリ朝熊ヶ岳ニ西行谷アリ異本ノ句誤寫甚シ

芋洗ふ女西行なくば哥よまん
髪ヲ連句トナスヤ

平家物語小督ノ局ヲ月ヲ面影
ヒヘシ

奈良坂ハ奈良北ノ名般若路
ヘ行キヨリ

ゆくすゑの絵ハ者しの絵之名所ノ
掛ヨハヨリ

節供ハ節句ノ古字ヨリ

ロをくくカリニテ清水ヲ雑ニアガ
ヒシヨリ

九月十三日山城葛野郡太秦ヨリ
祭文寄ヨリ

朝顔屋商戎者みとくに花たる　昌達
長佛一ことばの社あるとれ　李風
樵夢ぜ寄かれと住ひ庵ちて　重名
面名を橋のあ水ほる月　荷兮
傘の円ちはまなる雨の音よ　李風
新態ひる出家ほくく　面相
おくるたる西行なくハ奇達ん　荷兮
鉢瓶ひとつ拔二人ことなけ　昌達
世よあるを風流ま茸ちて　面相
記タミ長ふとふ暗陰の苔畑　重名
以くまをもと竹とふいとのく　昌達

才ま兄ま名ろりよゆく　春部

二月六日野水亭ニて

旦藁

すく飯や畑うつ山の山ちくら　野水
おこ一ろう雲むかくの鐘　荷兮
吉の新芽仕あるらん袴雲て　越人
口ちくぐ一き清水ちの当ゝ　羽笠
松風よちあきぬおの酒の破　執筆
夢ぬ一ちる出をちつ月　野水
笠白きたつ素柴るてよ　旦藁
為来ちる陽よふまんておく

法華ノ三車一乗心カ

鱈又大口魚

一本蚊やり　てこ[illegible]

千日万日ノ回向十ト云フハ寛文年間ヨリ始ルナリ

和名抄ニ鮎

筑紫人ノ浴衣伊勢人ノ帯ナト東西国々ヨリ入来ルヲ云リ

表町ゆうて二人警[illegible]ん　越人
成ぬこうゆ車ゆくまぢ　芳字
鱈頁して大津の濱よりうり　旦藁
行やらせんゑ国の春　越人
船をあちこちの井り蚊をうりて　羽笠
蕨ゆうたちふす万日の栗　雪水
里人よ薦を施ス秋ハ白　越人
月ちきぬ浪よ重ねあく橋　羽笠
ちうちちる本の松よもの鮎とる　雪水
泥ひ者ゆせる春の湯の山　旦藁
のとそ一ゆ紙衾の袂伊勢の茅　越人

唐三十眉ノ畜アリ和ハ又異ニシテクサ〳〵ヨリ且事物紀原ニ見エタリ

摂津栗ヲ勝栗ト祝語ニイヒテナリ

麦の粉ハコカシナリ

千観阿闍梨ノ住玉ノ摂津金龍寺ノ面影カ

魂祭ハ報恩経ニ二月十五日五月仝七月仝九月仝十二月八毎月ナリ

内侍のえらふ代々の眉ハ図　芳字
物思ふ軍の中も庭掃ハ　羽笠
名もこのち栗と命中ケ　雪水
大年ハ蕎仏唱る元ちす柳　旦藁
ものおとを乎よよき俳こ　越人
軒夕の芳藁のちめく相杞ら名を　芳字
都ゆ　廿日ちやを麦の粉　羽笠
一枝かる富ハ冬ハかゆ寺なれや　雪水
ちち魂やるるきちらき沈月　旦藁
阿実ちちえ弱ちる史婦て　越人
寺白袖ハ法寄いちくく　芳字

四方を拾てむ尺る里ゑ生れたり　羽笠
力の筋を法ぶし中の子　雪水
達や三井の寺ちの流とうゑ　旦葉
高びくのうぐひす雲の山く　城人
尺つけたり世界の月雲き　芳宇
雲のはたもめ氷ゆえまけ　羽笠

三月十六日旦葉の田舎にて　雪水
桂のこ雪てゆしき蘇芳　旦葉
額ゑあたるまゑ目のうち　城人
蕨熹る岩木の臭き高うて

旦葉カ家ニテ人贈答ナリ
ゆゝ一百葉忌ゝクナリ冬多
レタルヲモ云

巻月四ツ出タリ三句短句ニテ
長句二廿九日ノ月ヲ出セル一奇ト
云ヘシ

まゝ〳〵人を尺ゑる雲の子　芳宇
立てのる渡しの母の月新り　冬文
芦の種を摺る傘の縁　桃芳
磯際ゑ施餓鬼の信の集りて　旦葉
岩の石ゑ雨の花ゆる里　雪水
雨の日ゑ瓶焼やうし煙たち　芳宇
ひだるき事も旅のうちみ　城人
尋よる坊主を信ず隠おりて　雪水
解てゑゆ雪の木枝むすぶ松　冬文

日十九日芳宇宅ニテ

渡ヒ
芦
磯　三句一句ノ格

錠ハ鍬ノ字ニアラス呉音ノチヤウナレハ借字ノミ万葉ニ鍬ト凡カタ正シ

檀木堂ニテ十二句ノ後ヲ継リ

従四位下能登守源順秋壺五歌仙ノ人和名抄ノ作者トリ此抄歳時ノ部モアリ又菊ヲカラヨモキトアリ

四の宮川原山科ニアリ唐輪ハ髻ナリ

苹ハ蓬ノ一本草ニ誤ル紹鷗ハ大黒庵ト号利休ノ師也永禄元年没ス

もとハ會ノ許トナリ

井蛙抄ニ槙を折て滝の落る所を霊き侍る礼永の音も聞えぬあり々々トアリ

咲るけの菓子をきらを霧そ　秋の和名抄ノ作者　新　順

初雪の新しよ河ふる里を折ぬ別の月日みちたあふたあふ秋

辺で見四の宮よりも庵霧いそ

春行色の笠もむつの

永ぬ日やを鶴を時ふ言るらん

簧の子蕚しまる百花中

紹鷗ハ大黒庵ト号利休ノ師也

滝壺よ柴押やげて言とめん

戎人	旦藁
冬文	芭句
雪水	野水
芭句	戎人
冬文	旦藁

岩苔ハ和名抄ニ巻柏ムラヲ俗ニ岩松ナリ

帛ハ繒也今ノ絹ナリ

此きぬ〳〵衣ニ非ス只ハ〳〵ヲ云ハカ帛ハ衣ニ同訓別字

志州鳥羽

雑居寝ハ山城愛宕郡大原ニアリ筑ア祭ハ近江坂田郡ニアリ二ツトモ戀ナリ異本一本トモニアラ〳〵ヲヌト他ル非ナリ

岩苔とりの簑ふさけら袴

むさ和りよ帛苔てあく世の中を

逆二枚もいろき乱庵

野毎の霧あち袴麦作る

碁打を落るきぬしの月

風の竹ゝき秋の日ハ一網入よ

雪月の湊ハ踊ひらひ平

あらすりめばあ筑ア祭ハ

法〳〵一期聲ハ鳴ハ

赤青の笠水汲よ壺起こ高

餅を咲て祝ふ笑ふ代

旦藁	冬文
戎人	旦藁
雪水	芭句
冬文	雪水
芭句	戎人
旦藁	

一巻中ニ岩木岩間岩草ホリ變化見ツヘシ

嶽字典ニ石山戴土也

後鳥羽院ノ御宇ノ番鍛冶ノ面影カ

山もさむ西ぶらん越ふ日よ　冬文
星ぶてらぶ雲雀鳴や　等雪

追加

三月十九日舟泉亭

越人

山ふきぶあぶちき咀の之ぶ花式　舟泉
蝶水のうらおまい岩橋　雖雪
きぶらきや鮒酒すぶき雪あって　義鍵
行春のため水ぶふ土筆　等雪
翁日を磨もつ船宿のいらめしく　牧草
月ちきぶ空の門をやくあ計

昌隆八里村法取宝永四十一月十六日
卒ニ五松の之まのちの為也代りの
表　此句ニ云カ
木の名ハ門松ノ木間十リ

芍藥園ハ良徳ノ別莊ノ号十リ

曙ハ明ケノ揚再思カ詞ニ面色蓮
花似タリトヱリ
白氏文集巻暖水斜ニ臥日曛
腰

昌隆の松ぶハ雪ぶ世代の書　利雪
之るの木の名ぶ慈ぶ見ゆるし　素石
初ぶ松ぶ雪里年のちきぶ家　留圭
ぶきの書ハ松ぶり表の家　百桐
門ハ松芍薬墨の雪雪し　舟角
鉢の之る水ぶのぶらく梅ぶ　羽笠
ぶ〳〵の小松ぶ雪ぶ砂ぶ　旦薬
曙の人新牧舟雪ぶひぶきう　杜園
獨ぶ之ぶ里の睡り　屋夕
星ぶう〳〵雪ぶぬぶの四方の色　春雪

きのふ子の日にふ丑の日九月
廿九日

古池の吟は貞享三年の作にて
是より正風の姿情定まる

[illegible]

[illegible]は松原らし牛の夢　猿雪
[illegible]二分柳の動く白い寿　芳宇
[illegible]の野の赤ひくきこゑ　同
[illegible]て酒たき煙り　旦藁
のれる人の行く沼を
[illegible]の雲つやつや夕霧　城人
古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉
傘張の蹴り坊主のやとり引　重玄
山吹や坊主くさの酒たやし　亀洞
[illegible]て夢うつ西を見ぬふれ　城人
春野吟

撰集抄　信濃國佐野とやの[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

待ツケ[illegible]夏の夜も長くシキ由ヲ云リ

三才圖會曰豆宇島トヨカツ[illegible]
島今ノ淵古島ナリかつ[illegible]

[illegible]を出る庵やうら　杜國
[illegible]ぬきの[illegible]　李風
板木にて[illegible]の[illegible]　芳宇
錢[illegible]
蒔の[illegible]ふのこゑ　城人
山畑の菓[illegible]すゝ日引　重玄
板ひらに[illegible]板[illegible]の雪　同
夏
おとこきんの[illegible]の尾をもし　九日
[illegible]の[illegible]　李九
かつを[illegible]板屋の[illegible]の一里塚　越人

鳴ハ十リ

弁慶ハ文治五年壬四月廿九日卒
繡毬花ハ白花集ニテヤマリノ如シ又
山伏ノ鈴繋ニ似タレハ云ヘシ
ヨそゆくハ死出行ナリ

老子経四十六章ノ語ヲ前書
セリ

う裡ーさい菜如ク花梅のごとく
茅沖のうら路たらく荷の部
傘をたくすて笠ぬる秋の花

武蔵坊をとゝふらは

杜国
亀洞
丹象

ぢこのけ山てゆく笠の衣川
多こ坂の秋ハ笠ぬゆるむなり
馬始ておくれたりけり夏の月

南嶽
独吟

老聃曰知足之足常足

夕ゆふ雑炊暑き菓屋の秋
幕ホの涼面らゆきて明ぬ来
ちゝき木をたゝるもゝ中を啓たり

越人
柳雨
塵交

萱草五月開花六出四垂黄赤
アリ和名抄ニ忘草

法華経ニアリ

萱草を絵ハ暑きもの色
葉ハ紙の涼さ見ル冷菜来
咲の方法華屋の冬ごろの
夏川のそこの品のる水茎ハ
譬喩品の三界を安穏如火宅と
いふ心を
六月の所ぬくひ居る蠅来
秋
宵戸の烟たゝすび茅をそ
茅ホの乙菜
魂まつり柱ーむ夕の乳

芋兮
同
昌圭
圭石
越人
旦来
越人

山家集ニハ詞書ノ中ニ
ミヤヒカヒトアリテ
ヤマヒカヒ
ナル

異本ニ異足ナルヲトリ誤寫ヨリ
麝香ハ玉蜀黍ノ音便ナラン

雨きそ又一雫入まる水ぶ　白桐
きおりしくんを休むる月ぞこの乳　芭蕉
ゆちる木末搖るとの月夜哉　越人
瓦ふくもの面白秋の月　雪水
八島をとのける屏風の孫をえて
見足ぬて就のこゝろ月ぞ二ぶ　同
待宵
来ぬ殿を庵乘ウウキと　芭蕉
田居塚哀
神ひとり琴撥ちて舞ふ夜ぶ　同
鶴の子ハ来一つゝ来ヨ　舟客

薄ノ雪ノ八月十七夜八牽牛花ニ決ス
意ニヤ

名殘ハ正字餘波左傳ニ出
本義ハ離別ノ事ニアラス轉用ヨリ

馬ヲぬれ牛ヲ夕ゆの村しぐれ　杜國
芭蕉
雲ぞ来き旅庭ヲ板屋ヲ高ク作リテ
大坂花　如行
雪の朱葉一の邨　昌碧
ちぬ鳥ちゝのもるこゑのあるぶ　芭蕉
月の蝶けぶりぞ来きのこれ　越人
芭蕉葉伐おろしてかゝる村
氏仏の水ぞ乞ふ名殘ぶ　仕國
徳ちよかちゝ家をすゝけて
あちらしゝ茶碗一つ　義　芭客

七部ノ中六部ハ井筒屋左兵衛板
春ノ日集ノミ西村市郎右衛門板ナ
リ又一本ハ江戸ニテノ翻刻ニヤ誤
字多シ

貞享三丙寅年仲秋下浣

阿羅野

神社考日支那諸書指言蓬
萊者本朝有三所紀州熊野
駿州富士尾州熱田ナリ蓬花ハ
熱田ノ花ヲ云
荷兮尾陽藩士山本武右衛門
名古屋弁名町ニ住檀本堂ト号

冬ノ日春ノ日集發句連句トモニ
オクサマノ古奇ニテ尽シテ實傷
フモ有ニヤ

阿羅野

尾陽蓬花檀木堂主人若兮氏、
集を編て名をあら聖とのふ仏号な
ほ名あるうちを若くして、早たるよ
ひなるよ。ひとくせ世郷よ抱腹ス人
もうくの言葉。あつめて冬の日と
ぶせるこゝを年を続きて。春の日
ゝ世よかやうのよや衣文篋
弥生の言のうき。柳桜の絮を
ぬふ。蝶をのむのさはぐ。
風情よつきるゝ。いとこゝ言葉そ

万葉ニ荒小荒野ト見エタリ
荒ハ生ニテ人氣ニ疎キヲ云
巻首ニ荒野ト標シ巻之一ニハ
曠野ニ作ル
曠ハ空也又疎曠也

荒野集目録

巻之一 花 郭公 月 雪
巻之二 歳旦 初春 仲春 暮春
巻之三 初夏 仲夏 暮夏
巻之四 初秋 仲秋 暮秋
巻之五 初冬 仲冬 歳暮
巻之六 雜
巻之七 名所 旅 述懐 戀 無常
巻之八 釋教 神祇 祝
員外

赤遊苔言ノ空木綿ナリ
朗詠集ニ裏ダレ草ノ雪ノ
のとなくてあるこのなのきのみあ
るかをゆふ

山家集モ在ナノ郭ヨ有ル
姫百合ノ伊ヨツクシ又ハ
くろ百合ノ如

野守ハ荷分ヨサヽリ
つらゝ〳〵の年語ニテなれる
サヽヤト察シ名詞ナリ自ノ詞ニ奏
名つくるものなるら〳〵ナト今世
多ク多カスハ誤ナリ

はなすゝきものもはなれぬ秋ゆふ
のいとこのみすあるるゝ人のもとの
なきかはたとりて姫ゆりの伝ふ
つゆ〳〵。ぞ君のもとをまを形ばて
世業のきゝすりちきぞ芝ぬ
ちをぬるゝ雨もとと。比野の系の野守ゝ
なぬるゝ〳〵

元禄二年弥生　芭蕉桃青

曠野ハ日本私記和名抄ニ見ユ名

貞室ハ延宝九年二月七日卒

堀川百首色々のふもとの雲や桜らんこゝろさくらの四方の山の端

曠野集巻之一

花三十句

よしのにて

これはこれはとばかり花の芳野山　貞室

けふやくるをいそがする花のあらし哉　路通

なくもり象たるの花の林かな　信徳

これの山ほしからば清くて能よ霞　晨風

菁淋し花の後吹鬼瓦　友五

山里は喰ものたえる花見かな　湍石

何事そ花見る人の長刀　去来

うき身の糸まゝしはしも清ぬべし　野水

宗鑑讃州琴弾山ノ辺ニ住ス一夜庵ト号シテ狂歌ヲヨメリ
上ハ来ず中ハ日かへり下ハとまる二夜とまるハ下々の下の客

よくく　忌ニシ　又禁忌

一本ニおそうニ作ル原本おもしナリ
おそーノ仮名ノ誤カ

花の中下戸引て来るかひな哉　旭洞

下くの下紛れてそれも花の宿　越人

花の山常にかはる枝もなし　一井

見よしのゝ尋ねもならぬ花の滝　津島 俊似

兄弟のいろはあけぬ也花の時　嵐蟬

ちる花を酒ぬすむ人もなし　舟泉

淋しさに花でもよしや花の陰　胡及

ちる花に涼傘捨つひまもなし　長虹

集来の花咲たり宵の雨　津島 下枝

折時になつて逃たり花の枝　岐阜 鷗歩

まろかや泥子ハおもしろし花の時　荷兮

疆

偷安俗ニ云ユキヤウセ

和名抄ニ柿 柹ニ同ジ

絶俗ヤ 延喜式和名抄ニ出

流瘡の辺やぐ尺ゆるもの多 傘下
あらけなる和風車賣もの時 爲道
をよ寒てうきうきとゆきうる武 たつ
山あひの雲もとりはなれ出たり 心苗
おもしろや理窟をすまもの雲 越人
なるあひやまもうあ和尚雲水
猫来て友遊ひたり芭の山 雪松
雲ゆるとあらう貴みる尾上武 雲文
芭蕉て家のもとよ能雲す 爲芳

酒のこたるる人の弱み

月もなくて酒のむひとり哀 芭蕉

二十句トアレトモ十九句ナリ落
句アルニヤ可惜

延宝六年ノ新道集鎌倉ホテ
トカ出カ

あるの人の山ありけりて
檀の木のもとかくねすてく武 四

杜宇二十句

時をを鉢のくものまはて敷やうの
多鶏の屋目ちつんやうきに 雲吟
目まいまこ菜山ちきに初うはと 素堂
いをくりきを中まり留魂 鈞雲
爆竹のをうくやうきに 戦人
原しるのはすやや 時分 津島
海や先多菜の法く堂辺のほうに 松下
はるくよにぐをうきうむ雪の屋と 重安
 柳風

拾遺集いろもかをりらんかをくきたゆるのあるらんかをきく秋　忠見

ある人の許にて發句せよとのことなれば

かをくきたかもなきあとの秋　蕉雨
時雨ちるかをりやたゆるきくの花　蕉雨
枝葉に残きこの株見るかをりかな　一髪
三年ぶりかをりたえぬのきくの花　同

淀にまうで

かをくきたゆる十日もまつやき秋　風雲
時雨さめ森のかをりのほくきたる　岐阜　杏雨
あぶらやの行燈てきくの時雨　傘六
ちるこのうちやかう陣きほくきたる　同
隠とる時ちるひとりかをくまれ　鈍可

心ゆくきニテ殊サラ饗詞ナリ

俳卧　ハイガ

氣疎　ケムサ

ちくあり二の年の月を終わるこ

時雨ら格一ホ

二夢かるくきまくきの夫ほくきた　大津　旨月
ちつこのうどうほくきたちう時雨　李梅
ちつちとまのうんかをくきたる　市山

月三千句

かるくきの笠のうく行月　梅茶　十二歳
我終のしも月見る年の猫のれ　梅舌
月ちちちちちちちちのちちちホ　嵩水
面の月ぶきちちの月ぶきちちの月　一雪
年ちちとちまちちちちホ　越人
月ホ　昌碧

鶯ノ音便大ノ意

續古今集月こそは見る月なれとみな月の名書の月ゆゑ
る月を飛ぶかい欄ナリ

屋わたる社頭ひゝ山の月の影
をのしけよほのぼの深る月夜こそ　津島市柳
とこやとも見えぬ月の雲中哉　一樹
時雨雨ぬ月見この郷　杏地
ひらかやいかあらんるこの月　龜岡
名月を秋のるかはもきりかり　哉人
名月やうーよ十二をみけのつら　文鱗
名月やかい実たく法なく毋　昌繁
名月やはぐーてあらく茶の中　肇下
名月や鼓の響と犬の丁度　二水
見るものよ見えそ人の名月哉　雪水

十三夜ノ月ヲ賞スルハ宇多帝ノ御時ヨリ始ル明月無双之由被仰出中右記ニアリ

名月乃山のきりー
あつーと月を見るひとたゝ楽し　等雪
名の月もあらを忘れて見ん　同
名月や海もおもたゝ月見　玄泉
名月や下見とのむ中すき　胡及
名月をあるきもたふ枝の郷　知雪
青あをー橋ちをー山の影　一樹
十三夜
新をさ枝をふ知をを月雲弓　杉堂
新る
蓄ひのよ月の葉もなー海の果　等雪

新月似磨鏡又玉鉤彎月ト
皆月ノ見立ナリ

二日　全
星ふるよりはなきあの夕こゝろ

三日　芭蕉
行くすゑの尺たらずなるの月

四日　卜枝
夕月夜ひかりかすかにたゝんとす

五日　仔籠　一象
何日とゝもかくめかるや青の月

六日　墨嶺　鶴翁
新月の尺をもとゝやあの月のそら

七日

自然居士謡ニ彩雲飛の山新の
いろ雲ヲイフトヲ
いさゝかこゝを再案アリ

加生ハ九兆ノ初名ナリ

紙ぶとんたちなのしてゆる月夜哉　岐阜　一歌

雪二十句

大はまとそ

雪の日やあれすのく新の冬　其角
ぬきゆのむこ雪ふるたくあるかて　芭蕉
休の雪ふるとて雪のあるかな　京　蓼交
かさなるやあるかな山只の山　加生
車道雪ふかき冬のあるくこのな　加賀　小春
たゝく雪をたゝくうち新を浅ゆう　越人
はつ雪よ戸ぶ冬の雪の庵　是幸
ものうけの雪ぬきぬ雪のぬるかな　松芳

二水　島仙

岐阜　隙風

鳴河

傘下

芳川

色矢

桂夕

茅宇

浪面

唯水

押鏡ノ事

泡雪集記ニ沫雪其別名如沫泡

淡ハタカヘリ

三草紙ニ

えるをまきて卦て螺をつ

ける泡をアリみをらぶ一きぬ

まきさくつるけーとえトエ

古今集伊勢ふを寄て

石のもり川関ものくぬもり屋と

も後よかをうの物ものをあるる

螺ヲ新年ノ酒肴トナス和名抄ニ

小辛螺

和名抄ニ擲又柏

古哥ニ何をくるをうを年のをうの

をうをうをかるをうをうをうをの山

みかけてくるをなを海の雪　芳川

荒野集巻之二

歳旦

二日ゆぬうをせをなをの去

あれ人の至るるかし荒野夫

わの水や元子年の深くを踏

松ーをうを伊勢条異人を注

敬ク否を寄をあるをーー看

月雪のをあをを去ーー門の松

かをり本ふをらて年ーる松外

元彩や行とをををを注をあら

蕉蕉

釋　古梵

風彩

其角

文鱗

去来

一昭

浪面

歯ノカタムル祝ニナリ

三十八才ノ歳且カ

太神宮御造営ノ活木引ノ

伊勢物語ニ[illegible]カタ水ハセ[illegible]
カタド栗ノ大きさニテトアリ

千秋樂、盤渉調ノ曲ナリ

えるを吹きそめしさる[illegible]こと
歯固ま梅のもかもふ[illegible]
ぬるあを[illegible]
若水をうちかけて[illegible]の梅
伊勢浦や活木ら[illegible]の夫
こゝふきの[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]ちひさかしこの[illegible]
小柑子栗やひらをむ松の門
[illegible] 男ふ秋楽を習ひ[illegible]
山柴[illegible]
[illegible]引[illegible]

加賀 一笑
大坂 此行
岐阜 [illegible]
亀洞
同
昌碧
元慶
舟[illegible]
同
[illegible]
[illegible]

琵琶ニ月形アルヨリニカ

紀事ニ大和ノ國窪田管尾ノ兩村ヨリ出踏歌節會ノ学ニナリ今ノ万歳ニ全シ

おや、是ヤナリ

ふくハ能ノ面ニテ痩名おさナリ

野ノ宮ハ小倉山ノ巽ノ叢中ニアリ

月ちの初ハ琵琶乃木とり[illegible]
まてすまてふる[illegible]万家[illegible]
[illegible]
兄[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
正月の童のかゝらや炭たらら

同
一井
胡及
長虹
蘭浮
同
清水
京 [illegible]
朴什
冬文
筆下

コノ哉浮テ聞ユ初華心スヘシ

大服ハ点茶ノ名ナリ其式点茶ノ或清塩梅搗ヲ於茗碗之内而合家飲之

胴膨（ムクラ）
堅魚くハ　祝語也古本賢ハ書損カ
濱名ノ橋ハ遠江國元慶八年始架之長サ五拾六丈有ントテ云中古より絶其後猶地震堰橋火ノ騒ヤ賊ナリ　麦厚シハ田舎ニテ

ゆきの春寂（サビ）しかくるる　雨　こうな
ちひくしゐ松をきりをきしをや　冬松
大服ちを年の春茶の白いこな　松尾
夢の彫り少ちおれ年　男　防川
傘ゐ歯栄かくうりり元方梅　丈山　昌膨
袖をりて松の緑繋るを彫の妻　夕道
たてて見むる雲やうるる大かくを　梅舌
嗜ちく妻の初めやどうぶるら　雪水
ちつまの色をたき名人腔魚（カツヲ）　同
初夢や演名の橋のをのきぬ　越人
ちづや志度浦（ミヒラ）膨（ムクラ）ゐふの麦厚し　同
夢写

鎮守参詣ニ捧ン麦ナラン

巳の年ハ元禄二年撰集ノ年也

万茅の宮を御しまをりり　日
巳のくもむすの妻のおるつれ　日
ゐちを妻同りとふ立をまの毛ゐを　侍　般齋
ゐ乐武ゐ宮ゐまも茅ちやを彫の去　貞室
初春
茅茅つむ辺ち木を刈　畑ゐを　越人
精出て搗くもをえぬ茅茅　秋水
七くさをたくきたこうて注ゐ　津島　俊仙
女出て野ちちあちの茅茅ゐを　加賀　小春
側酒て袂の妻き　磯茅　弓　藤羅
吾妻も踊りておの妙茅弓　岐阜　素秋

原本作者ノ名察ト察ト相混ス何レナルニヤ
拾遺集ニ一つとふあやとのちも
わつきに初くくも春をすゑてなるか

スハエ
氣條

民部伊勢人胡来亭弘氏ヨリ

石釣て法名ちたる梅折しらり
春居て折ふすとの一梅の七む
うめの色ニ春ハいるぬ今さるか
藪入ハ志まきとうまをふむ梅の色
梅折て所ちり又西民聖中ニの
むもなきを梅のまそえ彩毎しき
みのむ一と志れたる梅のをのうり

紀代民新の息ヨ奎て
梅の未ハ春やとり未や梅のむ
春の峰ちとなくるまら一ル
春ハ春ハ鶯ひろふ侍ふ水

玄察
酔ル
城人
蕉桂
一坡
老松
蕉笠

芭蕉
長良
若旭
吉来

あけ方の梅や雪ちるとよ紙
春ハちらしきき藪ハ桂ら雪
春の梅不絶ちる所中ちる
春ハ春ハ鶯ハ所ちる
里家ちむ方を松の巷ちる
行ちて絶ちぬ家ちる邨
行人の蓑をとちぬ家ちる
加賀芝や春ちるけちの一二寸
かけちる春ハ墨の跡ちる
水仙の花ちる春ちる

伊賀
一桐
津島
一笑
日
市柳
日
夢之
梅舌
呼水
塵交
老笑
芭蕉
傘下
路通

つゆの下ハ新ノ端ヲ云

蟬句帳 終

當座題

清き流れの水の底

舟

接木

鶯

卜枝

數深く櫟葉の清の如く

同

望一六伊勢神路山林ニ住ル守武ノ風ヲ慕フ慶安頃ノ人紙捻ノ音便ニ有リ也

白尾ハ繼尾ノ雁鳥ナリ

翁口相似る句ハ集るやすし時ときを一所ニ置ル也

清水

同

菊弾

白尾雁

壁水

蝶の囲ひ

立白

亀助

舟泉

其角

蓮笠

塩車

蘭亭主人ハ王羲之ヲ云晉ノ時ノ人ナリ

追

川舟やもとのつてはむつましく　冬文
はるゝ〳〵所中ゆきかふひとの　書江

蘭亭のうち人沈り鶯を

沈よ鶯なの〳〵假名書なふ梅ぶ　素堂
風の吹かるゝを後のやなぎかな　曙水
行るゝもなの〳〵とるり柳ぶこの　越人
き一枝なる梅なるもなし　一笑
尺もかりはやなぎみぬる梅ぶ　小春
すかれ〳〵梅を風るとうつゝ　一笑
うつきて義をとむる梅素　昌碧

さてれも髮のゆるゆぬ梅素　春雨
みー〳〵くて埋るのるる柳ぶ　此橋
ふく風ふ牛のうきむく梅ぶ　春雨
吹風ふ腐かるるやなぎ素　松芳
風ふうぬ日をかうの柳ぶ　校越
ぶるー〳〵き野搬治をふぬ梅ぶ　荷兮
梅梅ふみふく月の柳素　全
春柳ふもたれて通る車ぶ　素秋
引いきふ浅くふ柳素　路芳
菜の名を元をかれも梅ふ　生林

仲春

夜の葉よ葉のもかくる嵐かな　不悔
葉のもや杉菜の上のあけよ　春虹
なのもの庭ぬるうる日影かな　傘下
葉のもの時雨ちぬ時をまつめかな　清湖
うくともひそで細うつ鶯かな　玄来
万葉を仕舞てうてる春田かな　昌碧
桜やそ折をくらくさくら来　哉人
庭庭よ一本桜一本桜　笑畔
ちきくよ笑千さくふ咲ちよう　陳風
ものとくくちちちくく桜かな　一樵
うくろうくくさ双湖のさくらかな　春松

仰向ナリ
つらハ面ナリ
女院ノ御車ノ前ニテノ吟ナリト云リ
古本不圖ヨ而ニ作書損也

すこくくと山や春たんをさくら　一髮
春ゆくと力こくうゆること花うなる　聖水
あくぶけきよおくそんり聖迦の雲春かな　陳丸
高野くつうを春もる雑くうの　一言
行くを梅雨紙ぬてやる雑くうの　塩車
ほをつくこ奇ヤあくる　桂こうの　山雪　宇治
嵐こて入きくぬかくつな　蕗桂
あくつををむくくさくよ鶯桂　哉人
いくすをくと背くくる岸の桂かな　去来
見人て去はけ水神く桂こうな　蕗桂
不圖見て後ヨ在をくる桂ヨのよ　津島　松下

[illegible]の唐[illegible]へ入る[illegible]

[illegible]を見の足生[illegible]

[illegible]の葉にちゃくてる[illegible]

かや京の中[illegible]

柘芝やの葉たんもの[illegible]

[illegible]の葉もつのぬま土[illegible]の葉[illegible]

ねゞ[illegible]

ほうろくの土ろ[illegible]

[illegible]はろ日の生[illegible]洞の葉[illegible]

草刈て堇採生[illegible]

一井　松[illegible]
梅園
枝玉
百茅
[illegible]知
[illegible]
[illegible]水
舟泉
[illegible]

笈小冬　西河ミカウ　[illegible]

[illegible]の[illegible]のそゝり[illegible]

麦畑の[illegible]

[illegible]や[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

松[illegible]

山[illegible]

一重[illegible]

[illegible]

[illegible]

去年の[illegible]

[illegible]

燈[illegible]
杜國
大坂　武之
芭蕉
聖水
一枝
岐阜　[illegible]
日　蓮[illegible]
去来
俊仙
[illegible]之

蓮の葉を敷り荷葉の形
黄なるよりたてゝ出たるを蓮の
皮減て嶋もなきやうなる物の形
角なるもやはらかなる小花に
すゝ清き釈迦ふ浦の汐干に
釈もなき用ひ欲人や机の海
人妻む舟と俗とう汐干なる
山清ゆふもの海のもる鄙留に
紙衣やすゝきて出るき蓮のも
筆中すゝ蓮のすけぬ物舟れ
永きロや鐘撞辺もくれぬ之

山清史山蠶ナリ

水仙　紅
嵐隙　蓮
旦葉　蓮
蓮　越人
傘ハ　友重
之輔
芋字　蓮ハ
龜洞　卜枝

糠鰕ノ魚將醤ナリ

肖柏号牡丹花三愛トテ香酒
茶ヲ嗜メリ宗祇門人ナリ大永
七年没年八十五

永きやゆ油しめ木のよるる夢　野水
りすのあゝ塗ゝを踏ゝ　同

曠野集巻之三

初夏

こゝもかゝやはらきも物よるの月　路通
天石樽ものをしるやたくくに　傘ハ
ちゝもうゝかもさして天ゝき引　釋嵐隙

肖柏老人の古事ふ嵐ふと
いふ香をこのはもむなる文藻ゝれ
なるとて雲のちゝ越人ゝ松茸ゝ
を志乎ゝ物くゝ物ゝる芋葉ゝ之文藻

宗祇法師ハ髭ニ香ヲタキコメシト云

石葉ハ貞享五秋葉山ノ吟ナリ
笈日記ニハ一葉の一葉ハナリ
和名抄蒙草又蒙子花

コヤつうを〜〜〜〜
髭ニ 焼香もあるべし〜〜 文仏 荷兮

山路来て

芭蕉
一井
越人
岐阜 不交
同 蒜蘿
亀洞
竹洞
鈍可

なけ山やとり水の浮ヲ水 夢丸
上ケ土ヲよいつの稔とて麦一種 玄察
柘色ハ麦ほうり尽る夜聖ル 生林
麦刈て菜の木ばかり残りけり
麦刈ふる土ヲ里の菱こ蔦 作志 不知
ちらくまもかちや城の蔦いろ 鈍可
鳥死て何ふきけ〜の一重ル 嵐蘭
〜菊て赤ふ〜菊を見る夕ル 菊松
大柱を見よこと〜〜一帝〜のも
菊ちひ水史を拾ひぬ〜〜の香 岐阜 李桃
深川の庵ふて 東巡
吉次

業の塵集に破キさて業之み
あらく変化きくの基位より宗
祇同時ノ連歌師ナリ

拾遺集ふるきよりふるきこ
ちゆえ入四つきくるかと思ふ
せ世話の自　和泉式部

庭の秋はみてうゑ秋はきて
さひしきあの色を見えぬかな　嵐雪
仲夜　暁水
宵のうちて笠ゆうくるる雨の邸　孤井元楠
刈芝のうつ風よ笑う雨の邸　一葵
垂ゆくき陰をの水流るる沢　不交
閑きよりふるきくの呼雨の風　風笛
及ひく追ふれ以降の雨の森　春江
百の松ちとうり雨ちなる　含呫
茅刈の神ゆうる雨ちなる　卜枝
水汲て濡るる神の雨ちる　鶴歩

桐ハ今穆ナリ

書窠ト半ノ作古人ニ見及ス

ちらちら見ゆる菖蒲の軒端哉　秋芳
板の戸に残て相の一本の雲りより　小春
板葺屋よりふるまよりふる時雨　杏雨
百の雨金傘のくるるよ時　板水
敷ち瘦て濡のうるるまりより　二水
藻の花をかたげる蜜の鬢ゆる　一笑
汐引て蓮の花ちかむ雨きの夜　胡及
見ぬて蓮の花ちかむ雨きの夜　児竹
竹のよよ汐蛍ちけも四りより　此樹
茅の時ちとうちとうちの竹　長虹
　　　　　　　　　　　　　　玄来

汀の水際平砂也

貞室十巻余集ニ此句見エス
さゝ〳〵ニテ洒ヲ諸説紛〻未詳

河を行たくてたちかへる水鳥哉　野水
長月百よ柳きるかな　汀子
歩行ゝ小蛙よちりぬ長月百　大津　一龍
長月百を鑑ゝ百月哉　尚白
岐阜にて　貞室
おもしろうさしをく船の船路哉
おもしろう一所にて　貞室
おもしろうやうてかへる船哉　芭蕉
おもしろく　芭蕉
船のはらに箱こゝまで榜也　芭蕉

和名抄ニ榜ヲ
万葉ニ石作ト有枕草紙ニ繪ヨ
ものおもふ
山ふきトアリ
枕草紙ニ
申る大まの河ろの三四月の
のなぬナトイヘル文也カ

船あるゝを能も寄うん船何舟　越人
先舟の艘も船も船舟哉　大津　淳児
曲江の箱の見えぬ船舟哉　梅餅
暮の菜の花をみるる夏堂の事　路通
松笠の花をみるる夏堂の事　卜枝
松の花をかくれ堂の標哉　鉢可
蘭の花や波よりくる雪の面　同
撫子や蕊陰書人ゆとうむらん　越人
行〻や灯のこる夏の船　蘇鑑
夜の秋や禁中に簾見る里　旦来
庵の留主哉

無名抄ニ夫おこさぬ友めなれつゝ[illegible]
[illegible]
夕貝や秋ハの吟千鳥掛集ニ
初秋中ノ一日叫ばれてト詞
書アリ伊達永むつ千鳥吉今
抄泊船集ニモ秋ノ部ニ出タリ

和名抄ニ楠又櫟樟

元亨ト十ヽ和ト文言カケナリ

きびはきこまぐきふ友の炭俵　其角
夕貝や秋をいろ〳〵の鄙こゝろ　芭蕉
夕貝の志ゑむを人のたゝぬこゝ　曙水
夕貝や牧の篠ゑのうさぶ　俳雲
山路来て夕貝見くる聖中ゑ　津島　布枕
名を尋ちは浦夕貝よ松を哀や　北虹

暮夏

梅も動くやうこゝ梅の実　昌碧
雲の峯海ゆけばたゝむちり　曙水
夕立や子蟹ゆく途縁ゑ　傘山
涼さに板もやゝぬ木陰の毛　法印　法印

涼さよ白きうち入る新　玄来
簑ーと涼ーや和のそひ里口　巻雪
はきゝ屋の松あるふぬ墨ゝ茅　同
おもゝたの人よゝをうゝ夕涼ゝ　鳴海　如風
乗石の石苔やゝの下涼み　津島　俊仙
涼ーさや橋の下ゆく水の音　仝
桃灯のゝゝゝゝゝゝゝ涼ゝ舟　卜枝
涼ーさを竹生ゝ[illegible]川辺ゑ　来雲
吹ちゝて水のゝゆく[illegible]この那　岐阜　秀正
蓮見むゝふさうやきちやうこも　松阪　晨風
笠をぎゝて[illegible]簑よう　古梵

鈎鐘 卅五六月開ニ紫花其形
扶鈎鐘ノ如シ

河骨の水の底より流れ出て
ちらちらと清水に松の古葉こそ
きみきうて汐干の沖の清水に
垂あゆくさやかに踏ふ清水に
引立てたるよのたる清水に
かくひくちの浅茅葉より清水に
垂をぬるなる踏ふ清水に
垂干や蓑を重ねてさらす茅
麻の露はらはれてうるの海
鈎陸奥仙台なるなるなるなる
鈎の上に蓑はれてるる

芙水
長虹
俊仙
文圃
潦月
西白
一髮
卜枝
岐阜 雪晨
越人
素堂

雲居名希膺妙心寺ノ二世松
島瑞巌寺ノ住職万治二年八
月八日寂

曠野集巻之四

初秋

ちらちらや麻刈あとの秋の風　越人
撞の葉やひらひらかふる秋の風　図解

松島雲居ちらちらと

一葉落るかすかすきをうつ　仙化
かくひくちのちくむや秋のうちもき　津島 方生
男ちきき羽織を星のうら面白　杏雨
鈴虫ちきの風蓑ちくぬさうり　芭蕉
蓑や塩ひの中の赤くふるき　文鱗
鈴虫の白きに蓑も尺又ぬこ　等躬

牽牛子毒アリ此葉ニ虫生セス

和名抄阿世ハ田界也

みをそむける神の前に詞の句によりて　同

朝顔をさらの子にやるすゝきの　鶴歩

講かける朝貝沫となりにけり　胡及

あさ一の手やひくこの水は躑躅なり　嵐蘭

葉より葉をつたふや雫の露の音　去来

秋風や去年の木の葉は弦ならん　呂長

深しきに庭の真ヶ釣鐘の露　荷兮

畦(アセ)道まで高物すゝる稲葉かな　一髪

松虫も鳴る此にし帰りけり　素秋

きりぎりす満て啼にけり

あの雲は稲妻を待たよりかな　芭蕉

續古今集ニ何となき草の花さへ見る時は露のかゝりておもひ乱れぬ露けかるらん

ひよろひよろは花なり

住口上人ハ伏見西岸寺ノ住職ナリ

宗祇ノ句ニ名もしらぬ小草花さく川辺かな

稲妻やきのふは東けふは西　其角

嫁かれ子も共にらくしや萩の花　母衆

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉

撫作る見えぬも蒲萄来　作者不知

見かへりしかけの萩に哭くなり　伏見 住口

もえきれて蝸をもたぐる萩の花　荷兮

行人や堀にさゝるゝ萩の露　胡及

宗祇法師のことばによりて

名もしらぬ小草花咲野菊かな　素堂

としよりの植る高き萩の露　俊似

仲秋

翁曰字餘りの句作の味ひ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

白氏文集ニ林間煖酒燒紅葉
間ハ温寒ノ間ダノヨロシキヲ云

加ぜ　栗なる鳥のとりうち　秋の蓑　芭蕉
法々と　隣をなる　秋の雨　ゝ　加賀　小春
谷川や　筏をくく　秋のくれ　俳仙　益壽
石切の　寺も少なう　秋の蓑　筆こ
笄の　芋や栢栢　紅葉　卜枝
康の　寺ふ人の　点なる　夕　一樹
因と　細を　指たの　む　葉　伊勢　一泉
山　康　作りて　笠　重五
[illegible]　[illegible]　[illegible]　甚角
[illegible]　[illegible]　[illegible]　東順
[illegible]　[illegible]　[illegible]　林斧

元禄二年秋翁ノ尋ラレシ時ナルベシ

堰堤

素牛ハ惟然ノ初名

[illegible]　越水
[illegible]　宗和
[illegible]　加賀　北枝
[illegible]　越人
[illegible]　防川
[illegible]　舟泉
[illegible]　杉及
[illegible]　曉籟

関孫六兼行ハ永和中志津三郎
無銘元應頃名誉ノ刀工ナリ
美濃多藝郡ニ住ス

坊ニ喜蔵院南陽院ト垂帯ノ
寺アリ

數杯ノ酒ヲ傾ヨ見セハヤシ

さて孫六兼行一腰志津三郎数　其角

よし野さくらをたてまつる

きぬぐくらをたてまつる　芭蕉

ゆきかゝやゆきかゝの宮の板這星　加賀　一笑

暮秋

なみたちくる柿の葉の白きかな　巴丈

志ゝ葉のちらぬを弟一口をしき　昌碧

少年のきく酒葉とまちがひたり　越人

一夜や作ふぬ葉のむさしのゝ　暁龍

菊ちる宮ゝ　落法けるる玉器出されたるとき

かたらけのゆもとを見ても葉の秋　其角

髪冠帽子ハ鉢巻ナリ公卿ノ召ス
フ物ト云フハ非ナリ五元集續猿
蓑ニハ朝白ゆふ木綿ノ人やトアリ
正シカルベシ

そゞ神ゝハ端絶ナリ此句ノ端書ニ
風声ハ天地の語ゝとゆゝしきをとり

三井寺ノ謡ニ来ラハ〳〵ト侍
らるゝやと思ひ出

葉の宮湖る人や鬢帽子　同

ゆふゆゝしきて葉の宮の汐木哉　二水

かたぐりて菊ゝ宮の汐木哉　伊勢千岡

沖ゝきを橦の実蔦る森哉　濃州岩夕

ゆる葉ものちるすゝもれや梅もとき

芦の穂にすゝ吹くあきかぜ　加生

曠野集巻之五　四題連

初冬

あめつちのもちゝ〳〵ゝ神ゝ哉　沈去

京ちるゝ人ゝ中きゝけゝる

一歩ゝ出て三井ちらゝ初ゝ冬　尚白

荷ニテ風ノ荷ヶトト異名ヲ取リ
風ハ和字より

端水	万句無約ふ
菊分	人を約とる日本
菊桔	炬火
傘小	菊分
一髪	同
同	同

本ノ蔥ハ書損ナリ

李最	菜もとめもの法そう尺そう郭
雪水	穂のもとそさまとまれて桜林
岩若	蓑笠のつつみ尺や一坊笠
同	麦蒔てあの菜よ朱し麦ゑ
一井	のとけ一やまとくれの衣こう
菊桔	隆ものもとみてあるる火隆菜
胡及	石臼の破てをう一や石蕗の花
文鮮	まくもも本紙を尺ゆ尺物汁
上枝	所くぶし紙約紙ようる蔥ゑ
洞雲	冬桜よ風の休ゑもなき歌ゑ
一髮	蓮池の加もち尺ゆる桜菜汁

中人等ニテツクリ鷹ノ頭ヲカク
又物ヨリ

おなぐ抜ニ蕾 俗用大根ニ字一

鷹居て石きりまつく枯野哉　松芳
風よ吹ぬくられそう鷹ノ北中　香尾
鷹狩の明るひきくる黄ノ紅　蕉笠
寒月
燈を出て戸くしをかけ　野水
あさ霧のたれあらふ月夜哉　後仙
仲冬
おろ〳〵ぬく鎌きつる霜ノ紅　津島 勝吉
ちら波とつまこたちる霜ノ色　津島 重治
掻ちらす黄ノ木ちる霜哉　林斧
紫の戸をほそくあるあれ霜哉　杏雨

宋之
杜國
勝吉
俊仙
除地
荻舟

いくつけるの紫をあらきそて霜ノ色
霜の鶴せんこんの雲のうつれる
水枯の葉の葉ノ尽さる冰ノ色
冰を池水ハ冰ノ歌きくり
波を切て松葉掻ノ為冰
打もくて仏掻きき冰ノ杉ノ
無題雪舟
峠より二宮舟来ぬ汐木ノ
ぬつくりと雪舟ノ来るはさ哉
板をきめて雪舟ノ来きる炭ノ
ろ屋より雪舟ノ出ぬ炭ノ

一井

棟ヲ和俗ニ栴檀ト呼

雪舟 雪車ナト見エタリ
汐木ハ塩ヲ焼タキ云リ

魁ノ種類甚多シ

蓼ノ赤ミヲクヲ火トスト云

雲母引ハ体むさ寒ふ云ふ
はけ〻の人てはくるこ言ふのうらやゝ
言海や羽白黒鴨まかーら
身ふたくゝ中よ多ちる衛うな
魚鮮をうえさもらうこ古る今
井を鮒る去ゝ月そく業てをきこ
もそを裸ちり

汗出て答よ実ちむ水安外
海嵐猶の壷埋めるき水安外
炭竈の穴ぬさくやら蔦ちう
猿節を陸こえをる こさき外
火とけて業る言ちり如を桜

亀河
合咕
白梦 忠知
亀河
村俊
冬松
利壷
亀河
塩車
賀 一笑

餅花ハ餅搗ノ時其始ヲ柳枝ニツケ花ノ形ヲナス

翁ト越人同道ニテ元禄元年歳
換月見紀行有
本名の杤深世の人のこゝやけ〻
の吟アれハ花の名ニ雨ノ贈リシ
ヤ又越人カ土産ニセシヤ
和名抄 掛

いつけ一底起ちて
み箭はゆくりてそんはちら

歳暮

餅つき松内よちをこん酒ちひ
吾書てよめぬものちう手の書
餅花の活ハすけてちりぬ
ちるをく指法を出る菜畑春
煤掃ひ掃ようけくる 鼠このか

本書の月天て年ちる人のこやけよて
掃の実ひちおくゝる年の書よちし
ちて天面きうぬちて
年の書 掃の実ひちこうゝと

亀河
芭蕉
生下
岩白
野水
亀河
一笑
春字

田作ハコマメノ祝語ニテ年用意作也

年中行事歌合文公事根源ニ出タリ三拠ナキ歌ハ異文年あさくさのもちひ初る事なるハつねへつくられ侍ハ

幼稚ハ葉子ヲイヘリ

春日祭三月上申日

嘉祥記ニ仁寿殿ニ出御ありて神饌ヲ御覧ありなんとまつりのうへ人

石清水臨時祭三月中午日

南祭ト云

門松をうゑて皆一年のひ　内習

田作ハ　蒔迄ふ扶の実を外　重酒

曠野集巻之六

雑

年中行事　供屠蘇白散

ゆくすえ　春日祭

年ごとに鳥居の苔の苔うなる

石清水臨時祭

皆ちとつゝみかけてきたる

兼犯年四月於清涼殿始テ行ル

葵付ル加茂ノ競馬ナリ

東山北山西山十ノ寺ノ法師原ニ施ル二十リ

万葉集ニ山上憶良萩之花乎花葛花瞿麦之花ニヲ姫部志又藤袴朝貌之花ニヲ

七夕草ト云ル九九八ニ

駒迎八月十五日也而依朱雀院御國忌設用十六日幸信濃駒十七日甲斐廿日武蔵廿四日上野駒牽

堀河院御時向嵯峨野撰虫奉之

灌仏

ちとつの日やはらそよ法ふ仏を

端午

れも夜て葵けるる奴ふ

施米

うちなびてたゝ米を出奥き

乞巧奠

茅米より七夕ふ巧奠

駒迎

瓜数も旅の宿や弱むゝ

撰虫

十月朝日行代衣節會

冬の夕べ多き衣の色の面白
多つるいとをと白紙ぬい

十月中廿五節帳臺試下云
翌寅日殿上倒醉アリ
古本ハ「ハ」ケ「ウ」誤リ
追儺大舎人寮鬼ヲ追ふ上卿
竿ヲ持テ追ふ殿上人桃の弓石
ーの矢ヲ射テ
白氏下朗詠下ニ校正シテ誤字ノ
誤ヲ攻ル
白氏文集卷柳絮氣力枝先動池
有波紋永晝閒今日不知云云

添水 填字カ 案山子 搏ゼル
モノナリ

草の葉や昆の色をかくしきりて
十月更衣

玉ーそ衣かつるかの花
五節

舞姫よ紫袋指をおもそう
追儺

追儺やゑのもとの鬼の面
詩題十六句

今日不知誰計會
春風春水一時来

添水ゆるるる春の風
野水

同卷十白片落梅浮澗水黄梢
新柳出城墻 上下畧

同卷十春来無伴閒遊少行
樂三分減二分 下畧

同卷十花下忘帰因美景 擕
前勸酔是春殘 上下畧

同卷十曙春春不住春帰人寂
寞厭風風不定風起花蕭索
朗詠云不駐ニ作古本云曙ニ作

同卷況茲孟夏月清和好時
節微颸云云上畧 古本微ニ作
巖誤カ被衣ハ袷ナリ

同卷廿池晚蓮芳謝牕秋竹意
深シ 上畧

白片落梅浮澗水
水ゆるるるとなりて梅ちる
春来無伴閒遊少
ゆるるるなのかるる時
花下忘帰因美景
庵のもとうりかやよもの下
曙春春不住春帰人寂寞
行きもとまらぬはのかちこそ
微風吹被衣不寒復不熟
孫枝ちる松風ゆるる所
池晚蓮芳謝

同巻十 暑月 元元 上暑

同巻十 大抵 元元 上暑 古本 抵ヲ底ニ作ル

同巻十 夜来秋雨後 元元 下暑 古本 風雨ニ作ル 書損カ

同巻十 長恨歌ニ遅々鐘鼓 元元 朗詠ニ鐘漏ニ作ル

同巻十 残燈 元元 上下暑 古本錯乱ス 本文ヨリテ改閲誤カ

同巻十 万物 元元 壊色四時冬日最凋年ヲ 上下暑 古本壊ヲ懐ニ作ル

同巻二十 月 元元 霜葉未殺黄々 草日暖初乾漠々沙 古本ニ華ヲ美ニ書損ス

同巻 南窓背燈坐風霰闇紗々寂寞 元元

同巻十 香火一爐燈一盞白頭 元元 下暑

暑月奠家何所有客来唯贈北窓風

涼天忽切如秋宮

大抵四時心總苦就中断腸是秋天

雲の旅ふ秋の空

夜来秋雨後秋氣颯然新

秋の月明て広よ如今

遅遅鐘鼓初長夜

耿耿星河欲曙天

残燈影閃墻針月光穿牖

萬物秋霜能壊色

十月江南天氣好可憐冬景似春華

寂寞深村夜残鴈雪中聞

白頭夜禮佛名経

一条禅閤兼良公文明十三年
薨去職人盡歌合ヲ撰ヒ玉ツ
ヲ撰述ノ書數十部ナリ

鏘字未詳

玉簪草　遊髮

佛名の禮ゝ獨聲くらす數ふ　舟泉

禅閤の經ひのもとにすまるる

ゆきくれぬ

鋸鏘目立

かけろふのうすくもつたうる

付木突

五月雨水鶴てもとし人の家

釣瓶繩打

うすくもの如海のこゝろ秋の里

糊賣

ゆくすゑの　きくうすくもつてもかこ

白氏文集巻四反魂香降夫人
魂夫人之魂在何許香烟引到
焚香処（此文間違不須史上下
畧　古本香字脱ス）

同妾ヲ長恨歌　攬衣推枕起
徘徊珠箔銀屏邐迤開雲
髪ヲ云云上下畧　古本来字脱

同妾小頭鞋履云云
天宝末年時世粧上陽人苦
最多上下畧　古本上ヲ脱シ書ス
今改

馬糞掻

こゝろ　の　ゆめ　ゆくすゑ　ゆくすゑ　ゆくすゑ

李夫人

魂在何許香煙引到焚香處

越人

かけろふの　ゆめ　ゆくすゑ　ゆくすゑ　ゆくすゑ

楊貴妃

雲髪半偏新睡覺花冠不整下堂来

ゆくすゑ　ゆくすゑ　ゆくすゑ　ゆくすゑ

上陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉眉

錦繡段　范蠡　呂仲見
戰成功早製身鈎草輕
動五湖雲宮中云云

同集　明妃曲　僧季潭
玉貌風沙勝畫圖琵琶
難寫舊恩踈宮中咫尺如
千里況復如今萬里餘

佛供ハ一向宗ノ佛餉ス

細長外人不見應笑
物を笑ひ　　、
西施
宮中拾得娥眉斧不獻吾君是愛君
芝草うち植えらく牡丹
王昭君
玉貌風沙勝畫圖
よう赤よりぬるその柳　　、
一日留をまるる　　
外
孫ゆの敷やは佛　　
鈎雪

辰
牡丹生ん陰ちの春る日このあ　　、
巳
諸沃の咲りよつて面いう事　　、
午
多ちのよ豆干ゆを踏ぬも　　、
未
梅の香ゆ武ゆの夕食ちうり　　、
申
五月雨ゆ鈴ちまるを終り
四ちたりて生ちまるを忘れ　　、

火振ハ松明ノ光リニ魚ヲ伺テ取
莊子秋水篇ニ曰何謂天何謂人
北海若曰牛馬云云

山猟　樹水
鹿笛のよくを吹おそれさよ
野鳥　咒竹
鵯突のりかけたる弓の弦
里虫　舍呫
枝たゝらむ雲より曙隣の
海魚　今
おもしろき鰯引うり盆の月
川魚　今
秋の雲移りくるの火ふりうる
牛馬　牛馬四足是謂天落馬首穿牛

同人宗師ノ篇語ノ豪英ノ字ヲ
膠ノ有ノ字衍ス

蠃螺子
莊子胠篋篇ニ絶聖云云擿玉毀
珠小盜不起
古文後集古硯銘ニ非鈍者壽而
鋭者夭中

鼻是謂人
方を指さゝ梶の跡木ゝうな　越人
藏舟於壑藏山於澤謂之固
矣然而夜半有力者負之而走
からたゝうち沙をの市ようゝたゝ
絶聖棄知大盜乃止
ちりよも此かをうもたゝむゝ
鋭者夭
茂たゝ沼をよりのいも火奈　桂夕
鈍者壽
稽氏の雪ちりうる　たゝ　配　この如　市山

万里小路正二位中納言藤房卿帝ニ諫表ヲ献シテ後遁世ス

島師直武蔵ノ国ニ謀叛シテ誅セラル

禅ヨリ浄土ニ入ナト尚所行ノ人ノ心ニ所ニ

上人ノ念仏三昧ヲ云ハカ

藤房

時雨やむ時をたのまぬ山もなし　一井

師直

哀しとも尽くさぬ前のなこり　長江

一休

いろいろの加ちをしや月の雲　潟水

法然

ちりぬるのつくるもあき熟の生　蘆洲

山岩

奥山を家とする岩の角　潟水

海岩

本苔ようし海苔也今改

白魚三式部　骨ニ大江山ト對セル句ナリ

尾州名古屋の木林人

名古屋ヨリ津島ヘ往還ニアリ鬼嶽ハ美濃ニアリ

万葉集笈白のミ坂をこゆる白雪の我衣手はぬれてけるかも　ト

海苔ようしなりとも苔ちりうり　仝

曠野集巻之七

名所

八重咲きそまさるる花四ツ女　杜國

白魚の骨や式部ヶ大江山　芭蕉

かるる時の松をもちかるうて　潟水

菖蒲一把かりてもとるな波よ外　蘆洲

雲嵯峨とも見るなかめをさうり

琵琶橋眺望

雪ぬる鬼嶽さふき弥生ふり　合作

笑ふ花さくも春ふみまうる春　宗祇法師

作ハ紀伊ノ同名ニエ[illegible]モト云リ

一本ニ貴ノ字ニ作ハ非ナリ

近江

同國

鳥羽ハ山城

一もとに京にそむけるかの
ごとくなる友の武蔵の国よりとて
住るゝ角田川をきくとさそ
ひくれハすゝろてト河ヒカリ

美濃國養老の山ゐの山寺と云ふの
[illegible]て咲しめしとや

芳野山そ布ゝ袁を一反

麦うつや内外もなき紀之賀のさと

杜國

五月雨ニ[illegible]れぬものやさの橋

芭蕉

瀧の水さらさら五月雨

去来

牛もたし鳥羽のほうの五月雨

一驥

角田川みて

ゆきのまれ嘆ぬの鮎なれ[illegible]

矢宮

みすのいろ秋ふる貝のおと

破笠

十六夜もまた更科の月ハ

芭蕉

不尽ト十三夜ノ月ハ本朝ノ景物
ナレハナリ

山城

尾州海東郡ノ地名ナリ
和名抄ニ[illegible]ハ孫ナリ

山城ノ名所

夕月や枝小水ちるる角田川

越人

九月十三夜

唐[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]の月ハ[illegible]

嘉[illegible]

鳴[illegible]の[illegible]やるを鳥羽田[illegible]

胡及

[illegible]宴を[illegible]の[illegible]

淡支

むさ[illegible]ハ[illegible]

舟泉

[illegible]を屋根[illegible]

岱白

唐[illegible]や[illegible]合て初しくれ

伊豫 隨友

むさ[illegible]ハ[illegible]

洗悪

[illegible]

俊仙

[illegible]

津島 一笑

星崎ハ尾州
不破ハ美濃國ノ名所歌ニ詠ル
夜ヲ日ニツグト云マ義ナリ

吉野紀行ニ大和国臍峠ト詞
書アリ空よやすらふトアリ

忠度ノ譜リ雑談集ニアリ

雲の不二蓮華花一つよかくまきにより　滝水
よし野山もゆくた雪のゆふ〻ふ　野水
星崎の雪を尺とやたくる雪　芭蕉
板のはやかの破のふ家のすく拂　如行

旅

雲雀より上よはるふ所ふなし　芭蕉
大和國ゆ尾村そ
むのかけ遠よりはるる旅寝の船　日
櫻咲里を嵐ふて通りけり　夕槿
日の入や舟ふとり梶の音　一髮
のとけしや湊の雲の生きなな　芳雪

貞享五年芭蕉翁更科月見の送別カ
以下七句同時

ひとり行て後よおもひ出ん　芭蕉

ある人の餞おくる

時雨ちるとおもふて笑ひけり　隆祝
無人ぬふ食ものくれる安よ　多松
板をこちまちよ板を敷る旅寝哉　只菊
月日ハ百代ハ過客ニ市の宿　松芳
夕ゝふとの大ゝひ〻ふ　金平下

芭蕉土を送る

稲妻ふ〻ふ〻ふ付ふ〻ふ〻ふ　釣雪
鳴ふて秋ふ〻ふ〻ふ秋の梢　一井
秋風ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ　野水

翁ト越人ノ送別カ

名月ヨリ姥捨ノ月ニ趣ヲ
吟ノ吟之

狩野家画工ノ曲物ニテ出ル
筆洗ナリト云

秋のかぜ　舟泉
雲くれよ海を初る人ぞ哀　嵐雪
さゝ〳〵ものこそ悲しけれ
更級の月を二人ぞ見て行ける　芭蕉
越人旅立ちを送りて
月よりの招き人とぞ思ふ　野水
おく〳〵稲ちおろつ黒木ぞ　芭蕉
物の業ぞ秋の庵　政通
狩野探幽画ノ曲物ニテ出ル
筆洗ナリト云
狩野探幽の筆洗ふるの甚角ぞ
ふるけよ秋の山　芭蕉

ちゝ山千子ノ誤ナラン伊勢
記ニ千ニ出ヲ有リ

東海禅寺ノ後山ニ有リ巨石ニ
以テ墓表トス

とゞまりて稲ちろ鳴も秋の庵　京　ちゝ山
八月の今ぞ一日の月ぞ　玄察
結きけ八重ぞ思ふ　一井
品川にて人を送るとて
涙ぞ秋の差ぞ　文鱗
芋掘ぬ秋の差ぞ　芭蕉
掘ぬ秋カ　津島　考秀
いく差ぞ　芭蕉
夢ぞ見て　蕉雨
其角ニ出ル時

天竺川ニテ西上人船頭ニ打レシ故事
西行一代記又本朝逸史ニアリ

[illegible]　芳号
越人
傘入
宇因

越人と共の田の稲刈て

芭蕉
同

[illegible]二人旅寝をあるじ
旅寝して見しや浮世の蝶もまた

述懐

芭蕉を捨て歩る附
きゆる時ハ此も消てしまふ
るを[illegible]田を打囃ちな

詩道
映宜

髻

玉葉集山家の部ニ
[illegible]きけハ父の[illegible]
[illegible]行基
和名抄ニ髻蕭サウ俗ハ章ノ二種ニ

[illegible]の田の蛙[illegible]

蕉桜

高野[illegible]

杜国
桜丘

桜[illegible]

高野[illegible]

芭蕉
荷兮

父母の[illegible]一[illegible]の[illegible]
[illegible]

同

[illegible]

杏白

一本の[illegible]

杉風

肩衣を涙[illegible]

亀洞

小[illegible]やら[illegible]麻木[illegible]

難児腸

三州伊良古崎杜國名菴ヶ
ヶ月トカリテ書の名ヶ月ト
余情ニ結フ格ナリ

廿四孝ニ曾参薪ヲ指痛ミ父
曾子従神尼在楚而心動辨而
問母母思ヒ爾薪指ヲ云ヘ

和名抄ニ奴僕

九月十日素堂の亭ニて

かくれすむやうめ菜の中ヨリ　ほくる菜　笠雪

こうの寒さもさまる菜の根植ル　暁鼎

人のいろをたつまて

されいこそたのもしき作の書のこゝ　芭蕉

旧里の人ヨいい津の菜

らのふしの薄菜よやぶる少ゆひ　杜國

強飯

薄菜かくあはぶ祝ふなるべやれ　越人

なる人のもとより天ようやとそ薄菜

我一紙おくらせて

魚ナリ

ゆくゝち吹母ヲ云　暖甫正字温ニ
亞

ゆくゝ尋常ノ句ニ憚ヘミ変
格ナリ

一有妻ハ子のめナリ

義ヲ忘ルゝ薄菜ヲ饑ヤ喰きよりり　芳兮

古ひの母思ひ出る暖ヨ

ゆくゝちゆくの吸甫ヤ次人雑の芳　嵐蘭

稍の穴ヨ熟ヨ思ヒ出て作菜ヲ　去来

目ヤ去ルゝ耳ヤ近ヨるとゝの菜　西武

古ひヤ緑の強ヨなくとゝの菜　芭蕉

きまゝの母ヲ思ふ父ゝの芳　陳風

老ヲ伝ヘて堅先ヨおろふ

りゝヤ釈ヨる菜ヲかゝりり　越人

点

妻の形ヲ思ふゝる人の素顔ヲ　伊勢　一有妻

子規の別時歌別の悲ミアリト云

堀川百首むら〳〵見〳〵妹ら垣
松い芝よりそひ生れ交りの
すゑ〳〵ゆきのこと〳〵て
長恨歌四頭一笑百媚生六宮
云〻

きぬ〳〵ゝ条のうちよりもおもかるべき
敷を出て年新まさる為きこれ
出平の所まさるまさらかるべ
むー千ま山神あるべくるなこの
もくけ色ー妹ら垣松い芝よりり
六宮粉黛無顔色
雪の心の猫書清きや月の新
一夫ゝうり人結の如るをうり
ゝきかふ
つまもーうるはれー女郎花
ゝうりかるべ猫書

除尽
長虹
文淵
老文
心棘
長虹
尚白
芭蕉
小書

越人妻妾の羈よつゝなれいと
しとるふ奥絹せー時アリト
云

衣〻ゝ男女重子置シ衣別
ニ取分ツ云

守武 天文六年八月台平
雑談集ニ発句辭世ニ非スト観
想ノ吟ナリト

禅語ニ生死事大無常迅速

書の名ばかりぬ清ー夏、計医り
松の年ゝ旅のよりり
為おもひ大焼を吹いゝゝ
うゝゝ巨焼清ゝ為ゝ
山畑ふ為おもゝ夢ゝ引
きぬ〳〵を霧ゝよりもとり年
おゝゝ〳〵ぬ〳〵のゝ弁為き
色岸
未熟ふ
為ゝを為ゝ所の弥陀仏ゝゝ

越人
俊仙
舟名
嵐蓑
松芳
冬松
昌碧

色岸迅速

守武

古今集ざつさ詞ちらし書の哀を加へいむ〻〻の人の袖をそまろ〻
妹ハ千子より

咲つゝ散つゝ櫻ちきり一の畠水　傘下

市場よ

南里和哀　堺　元順

杉坂の源氣ある人の方ちう

多ふ　ちやうる

櫻のかをり良ぬ　ちやうや　蕉雨

つもうの追善ふ

ちのうふかく沈る　京　玄來

所くちの小広ゆ人ゆるちやうに

なれ　ちの発句

世をそやく書の方ちかりうる

コ弁ハ江戸ノ人ナリ元禄元七月廿一日
歿花摘集ニ追悼年回ホ句ア
リ

山城貴船ノ下ニ小町カ墓アリ

死出ノ里入ナリ

氏里の梅の匂ひ里ふ事一　堅水

辞世

所ゝれて燃ぬ一ふ　コ　弁

子ふ　おれる比

似ゝ新の所ゝ　ちをちん一踊り　蕉桜

一京堅ちて

京雲や山所ゝ骨のうゝるさよ　釣雪

書の追善ゝ

ちゝみ年よ一ちでの里人ちれるのむ　自悅

李下ゝ書のみ方ちゝ一ちを

みて

[illegible]　玄来

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　芭蕉

[illegible]　嵐雪

[illegible]　加賀　少春

曠野集巻之八

金葉集ニ神垣のたくうとおもつをゆふかけすきおもひもかけぬこゝろのおくゝ

上人ハ建久元年二月十六日卒五百年忌ハ元禄三年

其きらふきの歌ニヨレリ

仁王ハ左ヲ蜜迹金剛右ヲ那羅延ト云

稚者

伊勢物語

神垣やおもひもかけぬ涅槃像　芭蕉

[illegible]　嵐雪

西行上人五百年忌

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

連翹ハ[illegible]　胡及

[illegible]　松芳

木瓜[illegible]　杜國

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

五元集ニ日輪寺の僧と連歌の
即ちこれ少々若輩にて云出ア
リ

慈恵大師ハ元三大師ノ一也法華
八講ハ一日三巻ヲ講ズル事也

序品 天雨曼陀羅華云々

ひまの海ほとりの作り塩 青 其角

貞享戌辰の歳弥生一日

東照宮の別當僧正の僧房に慈恵
大師迂庵執事法華八講の作る
ゆゑ一巻ヲ講ずれハ雖少ヨリ
序品の心を

蓮ひの雪ふむ音ハ一ツ哉 越人

女房の雖少ヨリ
夏ゆき前あり竜女成仏の和ヨ
ヨリて志ひの花ハ鼻ばかりの
考れを

詞書ヲ発句迄流華投姿
達多品ノ意ヲトレリ
ひの花ハ草ノ名

讃州

ふ角ん八不便カ

江流ハ禅ノ洞家ニ夏ノ修行ヲ
白重表裏白堂平衍更衣ノ
時着之

かろ〳〵と蓮ひの花や角ん八の
鶏冠の花上の人ハ蓮ひの花
古ちやつる寺ハ猪の薑草

同

八島ハ

海士の子ハ蟹ハ子ハ小生一ツ

俊仙

蓮ひの花ハ千鳥

伊勢

友山や木蓮ハ一の牡丹

一井

南良ハ

蕪葉

潜仏の日ハ生れ麻の子ハ

芭蕉

潜仏の千比丘ハ一石ハ子孫

鶏石

十如是・相・性・體・力・作・因・緣・果・報・本末・究・竟・等十り

大乘ノ經中ニ此語多シ

あかりハ金會三昧ヘカケテ[illegible]ルキニサキ燒[illegible]ナリ

石[illegible]ハ蛇籠ナリ

猶の石社像[illegible]の清山[illegible]

[illegible]ト[illegible]ル一日の清水ハ　一雪　加賀　一笑

十如是

おも[illegible]れて[illegible]る清水[illegible]　芳兮

即身成佛

[illegible]の[illegible]の佛[illegible]　惠益

[illegible]ひ[illegible]の[illegible]　嵐蹄

[illegible]　芳兮

[illegible]の[illegible]　採丸

石[illegible]の柵の[illegible]れ[illegible]　文里

[illegible]り[illegible]　龜洞

回向文ニ願以此功德平等施一切[illegible]

四時ノ景物ハ定家卿十二月花鳥ノ内ニ水雞ノ鶉有ルニヨルカ古本[illegible]ハ鶉ノ書損カ

[illegible]聖[illegible]

[illegible]の[illegible]　卜枝

[illegible]の[illegible]ん松の[illegible]　紹雪

平等施一切

[illegible]り人を[illegible]　俊仙

[illegible]佛[illegible]　苔兮

[illegible]　卜枝

[illegible]人[illegible]の[illegible]水[illegible]

[illegible]人[illegible]　[illegible]

[illegible]　芳兮

[illegible]佛[illegible]

[illegible]寺の[illegible]

こゝろの言葉ニテ秋季ヲモチリ

松葉ヶ谷日蓮上人四年籠ラレシ所ニ

薬し師寺の鼓のうりうて　甚角

多くの出て坊主をもとめや月の母　一井

鉢のまま木務をうる法師哉　卜枝

人のもとふけて乞んとす

ちるふ中をもとめたれば　蘭孫

加茂て又もとめしうり一時雨

猪倉の安國論ちかく　越人

芋まさ法や寒ふ水ら　

古寺の雪

曙や伽藍しの雪見寺　芋兮

同

千鶴ハ扶桑隠逸傳ニ出タリ

五元集ニ大津ノ駅ト前書ア馬

もゝくゝやこの八鼓詩ナリ

藥王品ハ法華經ニアリ

鶯雨

雪ふる如かなる二王の行脚　俊如

作り高てこうそれもゝ雪仏　一井

鉢の扉ふるる人のまうや神ゝ　文鼎

千家ク雪るるかせいく年のそれ　其角

藥王品七句

如寒者得火

ちるふ梅の咲ちら南うれ　胡及

如裸者得衣

雪りの日や酒樽移ふ所ちの京　〃

如商人得主

双六のおそ時ちむつりう南　〃

大角豆

万葉ニ脇字鏡ニ惰怖

如子得母
休立ておけいとうくさげ水　、

如渡得船
月の氏　諸の　板戸　ようり　、

如病得醤
かるく　時清水　尺行る　山吉　、

如暗得燈
秋の　松　やぬびゆる　時ふ　部さ　、

神祇
古言や言けい　かる　物子　氏

二月廿五日　本　細ふ

きさらぎ　廿四日の月の梅　茂兮
ちんしゅう　梅　節　かる　庭　冗
雪も　水　ちの　本　仲の梅　円
上　部　あ　ゆ　神の梅　龍湖
灯の　そう　梅の中　昌黎
ねと　ちゃ　梅　梅　約雪
笑　なく　ちゃ　梅　載人
月部　ちゃ　仲の梅　舟家
門　て　梅の　雪　雨相
強　ちゃ　人の　梅の　雪
笑　本　歯　原　玄案
鈍可

高砂ノ謡ニ久しき代々の神ぞ
友のつるぞ五てトアリ

李桃　炎樂　玄察　亀岡　朱学　芳竹　尚白　松芳　益樹　利春

鈴鹿川伊勢國八瀬川ノほとり

啓衡

ちり踏れしを名もさすがに和歌の浦なつかしく代々ちりぬる津の国の堀基

續後

ふるき世やる伊勢の海山かすみ桂ぞ
第の代も名ハかゝし鎌倉右大臣
古本青苔ハ青海苔ノ書損ぜし歟
今改

波の方ゝ舞ふ雪の汀ゆゑ
鈴鹿川松の根の新ゆゑ
かつらぎの神ゆゑ
梅杭や洗ふ桜かな　蝶

水　昌祭　村俊　卜枝

祝

扇付ハいくよまでも世ゆゑ
若竹の四十の春ゆゑ

冬文

いくよまも休ぬ神ゆゑ
天つ代やみちくの形ゆゑ
青海苔ハ青海苔ゆゑ
生ず巣ゆゑ

玉樹　載人　傘下　龍田

明白

浪華ゆくさくるものをそ笑ひ
そをそ老迎とはくやこの花　王仁

千代の秋中国にうつしまつ菊　同

ちるを見かつ散るを人の十つ子
生て枯一枝をうつの冬ごもり　芭蕉

文選ニ天台山ヲ四明ト云日本ニハ
叡山ヲ四明ニ比ス東四明ハ東叡山ヲ
云

永井信濃守家臣佐川田喜六
昌俊　寛永年間人也
芳野山花ゆゑ
ゆゑ

虎名事小学致知類ニアリ

曠野集員外

誰ゆゑ思ふ人ぞ仮り中はよあり
ぬ
ちるのゆゑ
佐川田喜六
寄を宮ゆ武蔵又
麦畑
此句座俗の
俳
田野人
虎

員外

古詩ニ巴東三峽猿声悲猿鳴三声淚沾衣
杜甫秋興詩ニ夔府孤城落斜日望京華聽猿実下三声淚奉使虎隨八月槎下界

花ハ散テ枝ハ空シクナリ
月ハ清テ云ヒナリ

吉本錢ハ書損字典ニ棧形如算

の物語もこれは虎を追ひたる人ありて
猫を愛しくしたまひ　謡のおもひ
猫のうしろなる子たちの中に猿を望て
家よりする三絃の流るゝ音の
家花牡のうちなるを如何思ひ白
をもてなして
妻をうれもよおもはれぬ所なりし　素堂
らの矢人ぶつてうけられしを
三人寄きいくるも吟して
多をさし　如さて岸一の絶実　暁水
棧の路よ志ろよ　まの事て　苔兮

和名抄ニ粮粉ハ蜜和米煎作リ
今ノ方ノシヤウ

夜ヲ山ハ月ハ山ヨリ出ヲ
琴

大原千句興行ニ

もの静なる夜あり　米うり　越人
門の石月結雲のやをうひ水　水
風の目利をを初秋の雲　兮
武士は夜ヲうる山も日とり　人
志ちうふつて滝の呼る音　兮
袋ちう酒ちう出て　兮
づぶろうれてるる村ふ面　人
立こうり松の木きる夜の塔　水
ふ白いちちの山小山の雪　兮
姥さうる一生橋も　暁秋う　人
酒ちうも　ちうも夕日松ちな　兮

利根川水源ハ上野ニテ関東一ノ大河ナリ

亥猪（井ノコ）ヨリ　和名抄ニ豚ハ豕子也

源氏若菜ノ巻柏木右衛門ノ古事ヨリ　ユリ字三ケ所打越ニアリ

寛宥ニヤ

歩鶏ハ一人ガヒノ鶏ヨリ

万作ハ豊臣秀次小性ノ事ハ将軍譜ニ見エタリ

凛（カヘヨリ）取ヨリ

遠汐やい詠メノヤ治定ノヤ云
標ナリエルシノ木コ云

のとゝ〜やハ歎美ノヤナリ

よゝ為ゝゐやナリ

麻

亀岡

荷分

昌路

聖水

舟泉

鈴雪

菅

亀岡

荷分

昌路

涼しやハ歎息ナリ

あゝゝゝかハ備ヒエナリ

式やハウタカヒナリ

慶長ノコロハ頬髭ヲ好タリ

法輪寺ノ

呼出シノヤナリ

鈴雪

舟泉

聖水

菅分

亀岡

昌路

聖水

舟泉

亀岡

菅分

高田派ハ向宗ノ派ナリ

小湊ハ日蓮上人出生ノ地誕生ち
ト云アリ

昌黎
釣雪
舟水
龜洞

友のうやハ詠メノヤナリ
楠のかつをハ鰹ナリ
田作ハ韶陽魚ナリ
一巻中やの字セツアリ一奇ナリ
原本鰍ハ鰍カ鰍ハ和字ナリ
同文通考ニ出ツ流鱒訛音
蟭螟 俗ニオボチノグリト云
和名抄 加比古
らんハ察シ疑フノ詞ナリやの字
ノ有無ニヨラス
ちゝくきハ鬱タキナリ
俗ノミンでもなきナリ

友のうやハ詠メノヤナリ
楠のかつをハ鰹ナリ
人なとゝ孤魚ハ鯉ナリ
つい田作ハ韶陽魚ナリ
美しを鰍ハ鰍カ鰍ハ和字ナリ
楠のかつをの鰹の卵
夕霧深きのうてうつるも
りくゝふんゆる角ケ
秋ふのたてもきは鳴くれ
ちひきうゝ鳴角カ
ちて

昌黎
釣雪
野水
舟水
松芳
愛文
芳兮
芳
泉

木ノ端ナリ

火革ノ一件取物語ニアリ

神異記ニ火革取其毛織為布

挾衣三羽鳥井の君威儀師

ゑ奪れのひ一面影ナリ

隆辰ハ文禄中人小唄の上手ナリ

後日蓮宗ノ僧 堺鑑ニクハシ

鰹節ナリ

美濃國

扇

法華經ニアリ

濱辺ニテハ貝ニ緒ヲ付下駄ノカハリニ履リ

瀑ハ借字

けーのもとより垂れ下る霧より
時雨まさるみ滝さらさら
美濃の門きたるあけみ藤分
次第しくるあくこうまきる
去の影赤貝きて行く光
新月よ夜るもの旅立
きけぶきは瀑を異らは夜を高
さらあるーちき山口の宗

文
宗
芳
文
宗

時雨ぬさらの打もちり
百の家よ夜るる戸の口

芳兮
野水

容儀又傾カ未詳不祥

大和長谷

懐中古轉ニテ物ノ憂ニヅカフ

衝張 強梁ナリ

引拵一車八琵琶のかくきて
行ふさぐおなくも人のからかな
身の秋旅のたくさる出るちり
一筋ふーー宮のきくらけ
和尚ふたちせの寮の坊主せ
茅舎ふむちをりをりけり
土蘭をクくよ撥よ生て
印米はあおたを紬を物うき
面後の実法けそ迎のうり
六位ふちりしの浮奈さ
代ちるうくやもくを結ぶて

同
芳兮
同
野水
同
兮
仝
水
仝
兮
仝

天仙蓼ハ中古ノ俗字ナリ
和名抄ニ本草天蓼時珍云其
芽可食

開ナリ

もゝ〳〵浄瑠理ハ薩ノ浄雲
ナトノ流カ

鯉一尺きよ鯉一 水
月のやどりかゝるかはらもとめし 仝
星霜をうつしてうつるまめし 写
天仙蓼ふる食ちさしまの雪 仝
かけくらるけて夜陸の中 水
多くしんとちりて居ぬちもあり 仝
夕せそき海つゝてやる 写
弱のやどりかるハ信濃ふハ甲斐 写
秋のたゝふしふむ〳〵浄瑠理 写
めくくもよそれよ忘し生分課 写
月のまよそるかたて 写

住ヒ住フト治ク詞ナレトモ本ノマヽ
通俗ニシタカフ

山の端ハ松と概ヒかすかなる 写
きつきるそらくとする 写
雲きるや彼方ひたすらに 仝
も越ふきよ陸のかるゝ 水
ちゝくくそくくる水貨のそ枕 写
寒之のそを解ふ〳〵 水
思ふもちぬ新て二年 仝
庭をつけて住居かゝり 写
之方の教むつゝとなるゝ 仝
徒年のそ鞋を笑く掃こゝ 写
陸くやゝ塩大東後嶋のそ 仝

夫木集ニ夜の秋の長うすくしくすむ月を糸もの二のあるようちちとそなる

誦

原本團扇 和名抄團扇 古文ニ紈扇如團月

自さしの月の影うすく八重の雲の遠き

もちく形るおもしろさ扇を

さしてもよろき團扇と宗

猶法の月をまんじ出さる夜

の秋の病をふまれて法師

月を病をさしてふふ紈團扇

秋のちるをうう夜の秋の病　越人

ちるをうつてちるぶん　傘下

猶ノ柱ナリ 疾ナリ

輕キ持病ハ表ニイマサルニヤ

啞方

眉

ちるのかけ形を風吹のちら

青柔柱つくおきてようかり

使の者よ近てうすくまる　同

阿ちくちるを猶のるをえるさまよ　人

年ちるるまてのうこうり　兼

ちてやふるの面ちをて面思い　下

ちるおもちけ不法ちくまる　同

大智の人法華を長ちて　人

自のうふ紈瓶踊りつ　同

喰材も又ふ柿も皆滑　下

秋のうしきの畑尺ちる　同

人

源氏物語正月より六月迄ニ生れ給へるものゝ賀を祝ふ
七月より十二月迄ニ生れ給へるもの賀を祝ふ
ゆゑ人ゝ名菓の賀を祝ふ

井蛙抄ニ顯照ハ独鈷を持寂連ハ鎌首もたけて歌論せり
六百番ニ合ノ時なり

灯　燈ノ俗字

高僧よ法ゆゑ世をもむくつき　同
森をこうちもち文字のゆゑむた　下
むの賀ゆゑ　同
見ものゝ数のこいき春のせ　人
打もれて浦の苫屋の夕年暮　同
内てひらて　下
破きものの水の飽きぬ　同
多くもちの春の隆ー　人
彩のもせ稲穂首まるを　同
ものく献上の時ちのひらり　下
灯春の油ーて神かゝー　同

詩経風ニ九月叔苴麻子ヲ苴ノ誤字カ原本草書ノ苴ハ苴ニ相似タリ諸説紛々

信濃ノ地名

百万ハ謡曲ニアリ

花ノ春ヲ花ノ弥生ト取ナシテノ揚句ナフニ

白をおこせいきりゝ　人
吹風まゆのこちらのふらゝど　同
半ハこゝて筆山の秋　下
むらゝと身ちる色の釈よ　同
人の詩ふいちつこゝも　人
まきゝ瓜や苴やを苔の迄　下
干きる春のこちふ町中　人
おちゝと小詩の千和の屋町　下
時国春ふ中ー す急仏　人
百万もちゝ春ふむの春　下
田乗きれて桜淋ーき　人

声のかしがましきまでやゝ歎息す
諸説紛然万葉二「枕草帝
二尾のかゝはきくゆゑなるべ
なれなるトアリ
和名抄ニ蘭蕙ノ二字アチハカマ
トヨメリ今ノ建蘭ニハアラス

五石ノ瓠ノ一トサコ集ニ注セリ

白氏文集巻十二長安古来名
利地空手無金行路難
ムるイ一ハ狂ニナリ玉トハ通
音

深川の春　越人

雁ゝ絶もかゝるを笑ハからはきや　芭蕉
酒ゝいたらふらのれの月　仝
義経逢家所をつらん　越人
聖をまゝ雨れくる秋の夕暮　仝
蠟燭の大きさ石をかりこ
風ゝ吹れて冬ゝ市人　芭蕉
ゆるもゝ長安ハ是名利の地　仝
医の多きこそ目くるしけれ　越人
ゝこの一と師走の京ゝ立先　蕉

玄番ハ掌諸蕃事音ゝ僧尼
変縁事一相当従五位上
足駄ゝ足駄前句ノ嘆ノ
後ニ祖翁生ヘリ為ハ抄ニアリ

物礫臭キ
漣や志賀の濱辺ゝ月
ゝ月の高松の夕ゝ尺る
頼政

鄭

ひとり寝やく寺の秋とり　人
時雨ゝ古き玄蕃の春つゝ　蕉
足駄ゝ踏ゝ物ゝ月前句ノ嘆ノ
きぬ〻せ行かれ石ゝ
風ゝ吹きゝ月ゝ
ゝ月ゝ屋の月猛ゝ
月ゝ月ゝ
雨ゝ在ゝ
破戸の紅ゝ
ゝ世ハ

人
蕉
人
蕉
人
蕉
人
蕉
人
仝
蕉

鏡の銘ナリ万葉ニ真澄鏡又
白銅鏡

御座所ナリ

山家集おとくきえ雪こそ
しもこもら緑と初霜の山ハ
あもりなりけり

源氏夕貌巻　山の端ちかくなる
ほどそ月のうつくしき
かけやうなくなん
東坡詩馬上續殘夢

家なりそ姫ゆりつもむすす鏡　人
物あはれのみる鏡のものいい　蕉
人をてゆくゆく香炉の匂いなる　人
初霜よりもる堂の内隅　蕉
時雨の嵐のなる宮中一本　人
垣根のきくけ霜ハらほまそ　蕉
なやなる炉ふ妹ゆゆきのめ　人
あれ雲を捨ゆ涙つもむそ　蕉
月のうつくしの宮ふて消きるホ　く
姑も老く勤よ心ふり　蕉
秋の四を かくを取るの長ゆて　人

漢書ノ蘇武カ古事ヲフクメリ

さいくたるうち文字同よ書る　蕉
いう夕くく底庭の木葉　人
弛老きるるの夜てかひなき　蕉
むの氏淡義まるもふやし　人
四方を食て臘きうち　蕉
第五
あはれて来る人のつ
蕎麦石ふの字の文や天津石　其角
之和さの角兄弟ちうとり　越人
岩木秋の夜ふ事を引きうて　仝

原本唯一書損

齒齒（ハキミリ）和名抄ニ波賀美

瞼（マブタ）又 万奈布太

東鑑六ニ文治二年三月一日豫州妾静及母磯禅師自京来鎌倉下略

二人静トイフ謡ニ女ニ静ヲ美ノツキテ和ニ人静ニテ草タレコトアリ 古詞ノ中ニモ。ちのうちをつ一つのうちを作りやトアリ 奇異方ニ九人自覺本形作両人並行並臥不弁真假者離魂病也

煩（ハン）ト讀 来レトイフカキ男ト男トイカニヤ万葉ニ煩トヨメリナヤミニ同シ

原本熟ハ誤字 古詩ニ醉後

飯てうきたる菜ハ水ゆきたる 角

袴ゆきて袴ゆけるる 衣 仝

齒きたるたる 人

ほくるる涙 魂のうかれ 仝

歩ハ 前ゆ歩 角

吉野（ウツミ）の離（カゲ）魂の煩（ハン）の知るたるき 仝

ちのうちをうち 人

いとるる 金二万吉 仝

ゆけるる 他人ゆ名なら 角

酒熟（ウム）き 耳ふつきるるきめる 仝

魚きるる 人

耳熟（ウム）トアリ 私詞ハサヽヤキコト也

ちめちの富士ハ須弥山ノ二轉カ

新勅撰賀うれ一きたる

一ハ袖ゆつきるる者ハ身

るるちのうちめるる

平家ニ西王母ト云一人も昔

ハあるて今ハ一人 東方朝

ト字一ものも名をのミゆ

て目ハ見ん又列仙傳ニ麥

ゆやハヨシマヨノ意ヨリ朗詠

言語巧（ウム）鸚鵡古

無情（ナシ）

ちめちの富士ハ須弥山の 仝

もとちて一ある 茶の 一瓶 茶

饅頭ちて 仝

うきせふつけて死ぬ人ハ扶 人

西王母ちの方朝ゆ見ハ見 仝

ゆ鸚鵡（アウム）の舌のみ一うき 角

ちのちをちて 仝

京の秋ちる 人

ゆ里ハ春一 仝

米つく高 角

夕烏ハの 仝

児輩ノ賭ノ遊

不形樣ハ伊勢白子駅ニアリ

念者法師ハ男色ノ

和名抄鳥蒜 胡葱

吟續ノ濱尾張ナリ築出島

居崎ヨリ笠寺村ノ辺リマテヲ

云トリ

いろの笠を着ふ強力人

穴いろは笠ちらしの枕 仝

ひるまかさりて伊勢の八郎 南

海月あふの樣をまうめる 仝

急去法師ハ秋のたのきかせ 人

夕まくれやさらさ年き武衣智者 仝

ちまきのくら実なげの窓 策

たちくふ食の鶴ゆひて 仝

ものきくふぬるさの鶴 人

むのふまるよりのちき後ちり 仝

むしろ義へき與強の者 仝

我不酬ナリ

眷面トモカク家ノ後ノ事ノ

ゆるき山唄さきれしのなる

和ちんは吟るくろれりお

もちろく

ちらど形酒い人の碓やきき

秋うそ宮ちいも汚煙 越人

月の中和書をうちふ中本年て

お面等の笠 仝

ちゑ行ひて牧ちぬ里の雪 仝

川越ちきハ球下のそ 人

疱瘡白の透とる経歯のき 仝

唱ハ赤ちをあるをり雪 雪

間ちるをれくのうき雪よ 仝

後ちひよをつふちうちを 越

ヤハ歎息

歎美ノヤ

かたよりも使ひ分けおる玉手すき　仝

行灯きえてうへる浪人　雪

若枝を褸ひもして一ッ統　仝

明るハ鏡さる一宵の月氣　人

白露の移て涼みる女子　仝

つれなの醫者の後姿や　雪

ちるもなき日ハ暮れても古めし　人

よふこ鳥ふとう何を好ふらん　仝

初雪やことしのひらる梅の香ま　野水

日のみしうまつらみる秋起　荷橋

治定ノヤナリウタカヒニ非ス

不卆原本ハ書損

無名抄ニ陸奥守為仲任果テ登りける時宮城野の萩を掘りて長櫃ニ入れて登りける

画影カ

癖子 吾脊子ハ夫ナリ 縁ハへりノ義今椽ニ作ルハ却テ誤カ

節ノあるかまハ志つつかなさトイフコトナリソレヨリ三弦ニウツレリ

櫟

山川や靜の息のをさかなきらん　仝

絲をたてくるえる人かりなり　野水

思ふさ浦押付ふ身まま好かつ　仝

わらことしし古樋の萩　荷橋

川越の少まされ行秋の白　呑

ねぶといくる薪のきさきなき　梧

ちとのせうをとりちなくかくえ縁の下　呑

まづかきわふ法のうしき感　梧

更る夜の湯ハむらうしと水飲て　呑

らそくりあとん花往の信　梧

峯の松なずきあくりさゆんぶりうう　水

卵ノ價ヨモツテモ元禄頃ノ時
世オモヒヤルベシ

やハ拍子ぬり

旅まくらうちのこころも蓑さ　桂
言ふて聞もちの重なも一文は　水
下戸ハ皆　くく月のおろけ　桂
耳や歯やうてもちの粉なぶ　水
具足名ちれたるの初年　桂
いつやふも雷やぬきおくふ　全
山伏行てんこうたう　丸
ちらくとぶぬけくる米車　桂
枕灯るてなをちぶをそれ　水
切るを法ちし髪を振おかい　桂
ちらぐもるもいちぬつふをき　水

延道行幸ノ道筋ニ延ヲおこナリ

瑞籬（ミヅガキ）

大和

ちつかいやうるるふをのせて　桂
かくる有年を給ふ　丸
る止て雲のちをるく面白ち　桂
柳ちるかを例の遠（エン）　水
軒ちくく月こをれ五十百　同
寂（せき）く秋を女（ヲト）ちう　桂
古をとくふをるるちやう　水
黍（キビ）ちてちたくへの遠　同
移毎の年重ゆるうつ頃ふ　桂
注ちくおををくたてる　同
まるのくちかう峠こえをく　丸

古今三さき　幸　種
さの三つと四つ系ト
讀リ　檜ヲ云　正木ハ良材ヲ云カ
すさきさ〻〻　飛彈のユトコメレハ
幸種ヤハ正木ノ略ナリノヤナル
カ　宮木引　正木の綱ナト　詠ハ正
木のゝらカ綱カ後撰ニ歌アリ
和名抄ニ鮒鯽脊　皆同シ

移ろへを雲雀鳴く　桂

一里の炭焼いつくとなり　一井

かけひの先の瓶ゆる　蘭孫

さきくさやまさきを引き誘ふらん　奴及

肩衣をうき酒よ　酔ふ人　毛虹

夕月の力添ちやき塩きハ　孫

ゐるくるよ鮎をつゝこ古き　井

里深く踊家　二三日　虹

宴日ゝ雨ふ雨きら秋そうき　及

問はそよ酒よものゝ云ふくき　井

萬葉　そ　きて切るとく文　孫

うゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　及

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　虹

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　孫

帖とり　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　井

津風ゝ　腫吹ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　虹

見るも　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　及

義者の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　井

蒜　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　孫

者の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　及

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　虹

紀州名草ノ郡濱中村長
保寺紀州家ノ御魂屋アリ
さ一矢ハ鴨羽ニテ巻ワラ刺ル
ナリ

杠秤（イキリ）

終（ツヒ）ノ義ニ非ス俗ノ突（ツイ）ナリ俳ニハ此ツイ多ノミ

御行状（オアリサマ）の詞物語并多シ

[illegible] 梯
堂宴経 [illegible] 牧屋を釣り 井
木綿 [illegible] 等し 松の 枝 杠
禅（ヨリ）[illegible] 人々の 無 及
[illegible] 井
[illegible] 孫
[illegible] 及
[illegible] 杠
[illegible] 梯
[illegible] 井
[illegible] 杠

鶴鷄（トカヒ）

行風 [illegible] 及
板屋 [illegible] 井
を [illegible] の内
ぬ [illegible] 孫
尺 [illegible] 杠
[illegible] 及

琢磨近江瀬田人濱田氏西落堂晩以西堂為名

莊子逍遥遊ニ惠子謂莊子曰魏王貽我大瓠之種我蒔之成而實五石以盛水漿其堅不能自舉也剖之以為瓢則瓠落無所容非不呺然大也吾為其無用而掊之莊子曰夫子固拙於用大矣今子有五石之瓠何不慮以為大樽而浮乎江湖而憂其瓠落無所容則夫子猶有蓬之心也夫

後漢書列傳曰長房翁乃與俱入壺中唯見玉堂嚴麗

陽秋雪子規ニテ春夏秋冬ヲ尽セリ

藻思藻ハ喻文、文思ニ同シ

元稹カ詩ニ壺中ノ天地乾坤外

越人佐久利氏姓越智熊本浪士尾ノ名古屋ニ住享保ノ末帰藩ス

かけまくもかしこき吾が大君の御代の栄えを尺の長きもて。皆風雅の藻思を。くまなく。ほりて。見いつめまほしく。乾坤の外なる我世界をとり入て。毎る度ごとに出でこそ

元禄三六月　越智　越人

翁曰花見の句あらたをおし
浮て殺さを考さるべし

皺皮又皺　鞘ハ俗字カ
司召八月十日諸官人ニ爵
祿ヲ賜フ
杣ハ和字ナリ　和名抄ニ功程
式ニ出タリ

信濃國諏方
俗謂身丈尺称春此字也

花見

本のもとよりはなれて
雪のとくなるよりきて
旅人の風かきけ
さきも雪いぬ
月ながら仮の四重の
籾臼つくる杣
鞍ある三歳駒
久ハさるくる降
入込て諏訪の
中あもせ
の高ま山伏

翁　珠碩　曲水　翁　碩　水　翁　碩　水　翁

伊勢地名
身田同国高田派本山

万葉ニ寂トモアリ目ナシ
堀川百首ニうつをもおもふ
一のあとをもとめ小才ニ云云

ひとをを性一方ニ
弱き命より
物ハ
月ハ
秋風の
ゆ
の都
順禮死
ひ
文
羅

碩　水　翁　碩　水　翁　碩　水　碩　水

花山院ノ面影ニヤ元亨釈書ニ見エタリ
万葉ニ朝菜陰舎紀関守の手
東ヲトリ紀ノ関ハ紀州和泉
境ナリ

ヤ、ハ却ナリ
隠逸傳増ノ翁ナトノ面カタ
ニヤ

為
頃
水
為
頃
為
水
頃
為
頃
水
為

花ノ字三句去リ
句引ハ冬ノ日春ノ日荒野ノ二集
二八十三　露集以下原本ニ在ラヲ
ニ九八
翁十二　玲瓏十二　幽水十二

古本ニ名ヲ付ケラレ一目ヲ見ル
ヒ意味をさらぬ〳〵人ハ一指を
ゆるさ一相宮の腸ハ〳〵ト
面

一費の紙もむづかしと西行の
醫者の茶も飲ぬ分別
却説も男嫌なるものと思ふ
忙しさるくさの山中

水
為
水
頃

いろ〳〵の名もむつかしや茶の子
うらもれて憐の夢ハ覚ぬる
梅梅の生家をつちをさしてと
嘴のうらぬ峠越しうり
宗義の言葉をかさねる合点
釈ゑもちゝをのてゆのくふ

頃
為
頃
全
頃
全

元禄比松の葉トイヘル冊子ノ中小六何ミト唄出スヿフシヨ
ヘリ

庄野　伊勢

吉ト
和日トモ

秋の夜ゝ言も聚のを孫のをり　巴
ゝゝゝゝ稚ゝゝゝゝゝ　仝
うつる雲の羽織を着引よせて　硯
小六ゝゝゝゝゝ本の影ゝゝゝ　仝
鶯鳴のちいさく大ゝゝゝ川の鶴　通
雲佛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　仝
うゝゝゝ第ゝゝゝゝ年の春　硯
庄野の里ゝゝゝゝゝゝゝゝ　仝
旅宿稚ゝゝゝゝゝ堰ゝゝゝ　通
むかしのゝゝゝゝゝゝゝゝ　仝
汐のさゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　硯

蕎麦ニ温飩ノ附一奇ヒ

李スモヽ

椀厳経ニ三エタリ

生鯛ぼうら浦の春うれ　仝
ゝゝ村の春ゝゝ鶯ゝゝ　苔子
ゝゝゝゝんおけ小ゝの　越人
かゝゝゝゝゝゝ退屈ゝゝ　子
ゝゝ法ゝ酒の酔ゝ　人
ものゝゝゝゝ秋のゝゝ　子
蕎麦ゝゝゝゝ小山の朋ゝ　人
うどんゝゝゝ里のゝゝゝ　子
ゝゝゝ持ゝの当裸ゝ　人
防ゝゝゝ鶏ゝゝゝゝゝ　子
文殊の智恵も繁特ゝ馬　人

鼇頭

枕草紙ニ　あせの香すこし
かゝえたるきぬのうすきを
引かさねてトアリ

班碩九　翁一　路通八
荷兮十　越六

なれか蔵ゑとハ出来し合羽に　兮

ほとゝもせぬに落る錫杖　人

志のふ衣のもとをおゝりかへて笑ひ　兮

釜より顔を見ぬおかしして　仝

汗の香残かくえて衣をとり出し　人

あさつき自らちうちかけて帰　仝

むさかり又る人の蔵るゝ　兮

春八旅ともおもはさる旅

城下

鉄炮のきこゆる卯月夕　野径

山家集ニ汐そむる浦とおもふ
小貝ひろふとて名の浜なり
いふなるらん又後撰
集梅かよそまことの蕣
袖の小貝ト詠ミ

原本、おもひきれてト見エレトモ
おそらく書損カ異本ニ又お
もふ言ニ作ル勝ヲヤ

袖の小麦の麻かてたうらく　里東

西風まうむかの小貝拾ひせて　泥土

なすぬる一所蝕いろ移らり　乙州

暮いさうい二人かうけるとのふ　怒誰

秋の夜書の秋中の影　珍碩

女郎花心細き家まお移されて　筆

しらふ又川原やよく覚え　野径

目の外おそくふ気かうちきる　東

新のをかしき生れつき　土

一里こそり山の下刈　誰

新古今集ニ寂莫の皆の名
歌のたつきをたつねるの
るの草ぬ見そ水茎

一本ニ躁ハ書損
博爽

尺知らずして岩屋に籠られ
られ世を泪にて明す　土
聖ノ冊子ニ越の遊女の言葉
を引て云つくしてるの紙　東
月ちよ庵を家て言ふぶせ　紙
ニ爽涼の塔ばかりき早蕨　坂
寄る寄るつけても都忘れ　注
半象遠ひの坊を注出し　東
春よりは庭の荒の一躁　坂
古をたづねるかやらら　物
吹くいる姓とも烏帽子　経
　　注

関ト龜山ノ間ニ大岡寺跡ヲ
アリナハ丁ナリ
硬ハ痛ムナリ用ハ要所ニ三度ヲ
去
莞爾ナリ夜着ヲ折り出し
る旅寝ハト翁ノ句冬ナリ
ちかちの草迫加ニ菜食冬ノ
部ニ出又花屋日記ニ闘取て
菜めしなのもる夜御の礼ト
アリ世ハ蚊句冬ナルヘシ
咳氣ハ風部ヲスフモ勝間
ニ見エ

砧ハ衣を又舞ハ他ハの格　土
英語ハ紙重の注やら　坂
連も力も皆産涙　東
から紙の大岡寺跡を吹通　経
生涯のとまるを用ハいるき　物
糊刷き萩ちらきの庵番　土
夕辺の月ハ茅食臭出す　注
看経の鞦ハ吉く咳家彩　東
四十ハ老のくるくるき除　坂
髪くせよ枕の塵を森歩て　物
破を面目をかけてふるる　経

野徑六　里東六　泥五六
乙州六　怒誰六　弥頌五
葦一

根本律ノ二鼠一鷺ノ古事ニヨルト又老亀烹テ不爛移竭於古東云云乙州カ事跡ニヨリテ考アレト君雜ノ巻ハ才三ニテ當季定ムルナリ

秋　、　、　冬

杉村の色いろ染つを　注
田の行陽に苗のとりそ　土

雜　乙州

亀の甲烹らるゝ時ふるもさん　弥頌
嗟半蓑ふる風のふく寺　里東
る蛙の未練仕まつれそのあと　探志
小唄とろかるゝかゝりの縄　留房
猫ゆそ夏のるひるを蚊の月　正秀
惜惜ゆてきゆる月惜　及肩
秋萩の山前ふるを拾主意　野徑
風呂の加減のたつらとう

春　、　、　、　秋　、　、

蛙の立てさきとうて鳴出し　二留
雲のゆくるかゆきるの蓬　乙州
和もゆ離の雲捨みたら一　弥頌
人の鳥ゆ恵をなり　里東
ぼうの鳥ゆ吹ことに一笛の役　探志
春ごとに部て少ハ鶯　房
鮎入の中ゆて有り　秀
ゆく上京も天ゆるやく雲　肩
蓋ゆ蛙るる羽の前のそ米　徑
雀を為ふ籠のぐくん　留
鶯墨るる口ハどもみてとを　州

蝦夷の子ソノ色白シ

寝語

鷺餌ノ雀鳴ちををきさく云云
雲をれハ大雲の後日和ノ徴ヲ云云

才ニハ木ワタ多ハ木綿モメン
ニヤ　夏
一本ニ搏ニ作ル書損カ
悍ハ勇急ナル
撊ハ店ニ全シ
鮓
秋　、　、　冬

緯いかならぬの皮らぬる　欣
淋て憂き木綿裕の袖をこぼす　東
撰れて字は明日の　志
喰切りに茶鑵の蓋をもやし付　房
綿するを鳴る音やすらり口　秀
いきりかかる継一筋に縫箔　肩
水汲うつる鯉　柳の秋　経
さらしを切羅の紙に風受て　嘯
年かの序にもれのこのすゞる月　将
喰あまし味の付こそ嬉しけれ　欣
條もくうちハ吹に老絡る　東

最上モカミ　出羽國
茨ハ以茅ヲ蓋屋ヲ也
節ごい節衣キの方言ニ
句引九名　畧
夫木抄ニ山里の刈田の面におのつからもちのふるものハの
口やうり　範光
白氏文集　紫蘭ハ大者ハ貧庸ナリ

同しとぬるも気のうちはそれぬけて　志
慈悲をかくさぬ兄の侍　房
まみしなるに拭ひちて擬をきり　秀
孫を集める寺の上蔵　肩
色の流れ書の目録に並て　経
きらる狂ふ獅子防き扈　嘯

田野

畦アゼ苗代村の角大師　正秀
明れハ家むし気の魚　松欣
傘そての見やくる嗅し春の雨　今
かやの人をうしきハ江の文字　秀

利休子氏仕豊臣家領三千石天正十八年沒

ゆりはは三句てけり

古今集ニ秋風ふきはらひぬちぎれ雲ハ月の宿りとぞ見る

源氏須磨巻ノ面影ナラン

月影ハ利休の名を梟ハかげ　仝

ゑ〳〵草をもちたるくん　硯

虫も落ぶれくさ咲ぶくん　秀

行ゆく〳〵の木蔭ゆゑ　硯

折ふしを　秀

ちるみぢぐさ　硯

須磨ハ中〳〵面影ナラン　秀

孤の恋ハ　硯

月求る師走の空の紙衣　秀

世程ふかく　硯

いとぬるゝ夫孤ハ折られて　秀

名の山の頃ニ詠ノ世ハ雲の綾の錦ナリ

禅門ハ男子剃髪称ナリ

藤ニテ撥ル窓ヨリ

おさゝや東鑑ニ時宜

相なるふも結綾ハ落ちる　硯

江戸海をもゆ度ハ高しかり　秀

ほひの山弾ちるの相　仝

ニ在ハ既ハ冀かをふし　硯

火を吹て　秀

本堂ハ中〳〵荒廃のもち孫の和尚　秀

蓮蔵の秋ハ孫の　硯

窟を痛むの人の姿を西ハて　硯

花ニ在ハ中〳〵むすこ廃ちる　秀

孫ハの言ハ我ハ法を授おき　硯

ロヽ果ぬいとまの時宜　秀

3年 月

芳しかれかしかる華袴　硯秀

かる肥後の隈本　硯秀

部て自分る役者船　硯秀

ちゝ様をしたり

めゝと叱られて　硯秀

けるを猫をゆられ　硯秀

人町のうはの

の根本の蓮華　硯秀

を踏引きるをあり

る結ぶもゆる功美　硯秀

今ハ懸本ニ作ル

宮ハ偽字

原本 吃ハ書損

ヤシホ
入ニテ色ノ濃ヲ云リ

句引畧

七部集中翁トノミ書ハ此集ノミ其角カ集ニ始テ翁ト書様衆撰ノ時翁曰我ヲ翁ト書尤可憚必書コトカレトノ玉ヘリ

滅後尊称ニテ翁ト書スハ苦シカラサルヘシ

芋ほり刈るこゑ華嶮　硯秀

秋八初る肥ほの隈市　硯

幾日後も話て自笑る汲古船　硯

素布子ゆ表ゑくゆり　秀

沢山ゑ元めくと叱ラれて　硯

咲ほりけるも猫を追ラれ　秀

る紙ほふ人町の石ほのうり　硯

やーー回の柳ヵ木の蓑蔀ゑ　秀

蓑もゑ雪踏引きる音あり　硯

小野ゆる結ゆもゆる坊実　秀